



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アリストテレスにおける発見的探求と何であるかの論証
Author(s)	千葉, 恵; Chiba, Kei
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 136, 1(左)-51(左)
Issue Date	2012-03-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48731
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS136-1.pdf



アリストテレスにおける発見的探究と 何であるかの論証

千葉 恵

1. 序

アリストテレスは『分析論後書』で、論証科学の理想的な構造と発見的探究の統一的、包括的理論を構築するという全体の構想のもとで、事物、事象における因果論的知識をもたらす方法として論証理論を発展させている。プラトンの分割法が科学的知識探究の公式方法であったそのアカデメイアにおいて、彼の論証理論は登場するが、それは探究と説明開示双方を含むものとして考案された。学園における競合理論との彼の知的論争はアリストテレスをして一つの精妙で魅力的な論証理論を構築すべく導き、そのうえにアリストテレスはこの領域における一連の関連事項の、哲学史上後続するすべての対処方法に対し高い基準を設定した。その関連事項として、一般的に言って、知識、因果性、必然性、科学、意味表示、本質、定義、探究そして発見を挙げることができる。

アリストテレスの「論証科学」のアイディアは「*端的な知識 (epistēmē haplōs)*」即ち因果論的で必然的な知識のための諸条件を特徴づける試みに由来した (*An. Post.* I 2 71b15, I 3 73a21, I 8 75b24 II 巻探求論には「*端的な知識*」は見られない)⁽¹⁾。そこでは論証 (*apodeixis*) の基本的な特徴は、科学者や探求者がその所有を通じて論証科学の体系内で一片の科学的知識を獲得する、その「知識を産出する推論 (*sullogismon epistēmonikon*)」にある (71b18f)。論証は、『分析論前書』において展開された推論の一般的な論理上の制約のも

とで、ひとつの結論にたいする当該の中項を媒介して或る無中項の諸前提の必然性を結論に伝達する。この適用範囲の広い理論は、その根底においてそれは因果論的説明の一理論であるが、彼の科学、論理、言語、知識の哲学そして存在論における諸要素を引き寄せている。

アリストテレスは、一方で、『分析論後書』I巻においてユークリッドの『幾何学原論』を導いた数学をその方法論の範型として取り上げ、論証科学の理想的な構成を公理論的演繹体系として追求するが、他方で、II巻において経験科学の主権のもとに入る対象の知識を含め、論証を科学的知識獲得の手段として用いることによって、発見的探求の理論を構築することをも試みている。かくして、『分析論後書』II巻におけるアリストテレスの主な仕事は、発見的な文脈のなかで、実際の科学的探究において実行可能な道具としての効果的な機能を論証に割り当てることである。

しかしながら、これらの二つの企画のあいだには緊張が存在する。それぞれは論証に判別された役割を割り当てているが、これらの役割は岐分しており、或る解釈のもとでは非両立の限界点近くまでにさえ異なっている。特に、論証の方法は確かに幾何学のような非経験的な科学に相応しいものであり、そして公理論的演繹科学の内部において探究の帰結を提示するのによく適応していると思われるが、多様な経験諸科学と協力しあう十分な柔軟性を欠いているように思われる、とりわけもしそれが科学的探究の過程において活躍する道具として有益な役割を演じるべきであるなら。しかしながら、公理論的科学的提示は厳密であるという点において、とりわけ論理学と数学に固有な制約の故に正確性を要求しているが、経験的探究の過程はその本性上流動的でありまた変異するデータに対し対応するものでなければならない。こうして、公理的な形式において探究の諸結果を提示するための乗り物である論証が、どのように経験的探究においてもまた或る役割を演じるかを見て取ることは困難である。実際、驚くに値しないことであるが、アリストテレスはI巻において論証科学の内側で論証の範型的構造を解明するさいには数学的諸科学をあますところなく利用している。そのとき、論証という同一の概念にとって、とりわけ経験科学における探究の過程における役割を見出すこと

にはわずかな余地しか残されていない。しかし、経験科学の領域を無視したいかなる探究論もまったく受け入れがたいものである。かくして、一方論証科学の理論は厳密に構築されるが、アリストテレスによりそれに課された多様な科学的役割の内側で変異する諸条件と制約に対応しえないものであることを証明するでもあろう⁽²⁾。

この懸念を提示しつつも、しかしながら、われわれは判別的でありしかも関連する考察の諸形式を区別しなければならない。ひとは知識を産出する端的な体系の特徴の探究を企てるであろう。しかし、同様にひとは、誰か個人がいかにかの或る個々の事物を知るのかを尋ねることを欲するであろう。第一のものに対する一つのアリストテレス的応答は科学の理想的な構造への言及によって与えられるであろう、そこにおいて知識は、或る論証科学によって一旦産出された場合に、その性格において命題的なものとして特徴づけられるであろう。後者に対するアリストテレス的な応答は探究者の認知的態勢に言及することにより与えられるであろう、それは一つの単独の論証を彼が用いることによって、彼に生じてくるそのような状態である。これらの二つの企てが相互を補完し合うことを期待するのは自然なことである。これらの相補的な活動のあいだに分割と相互作用双方を明示することにおいて、アリストテレスは一つの留保を提示するであろう。即ち、彼の論証科学のアイデアは「端的な知識」を獲得するための理想的な構造として、いかなる科学的実践によっても十全に満たされることはないであろうという留保である。しかしながら、内的な矛盾がない限り、一つの論証科学の諸制約の内側で途上の探究において獲得される情報の諸断片が個々の論証科学を構築する仕事に貢献するであろうこと、そして同様に当該の論証体系の一般的な諸特徴を吟味する仕事においても関連する情報を提供するであろうということをアリストテレスが期待するとき、彼はその資格を有する。

もしアリストテレスの論証理論が実際の哲学的そして科学的探究において真正な役割を演じることができれば、探求が現実世界において遂行される時、探究の実際のプログラムに論証が具現されなければならない。そうすることにより、アリストテレスは、彼の論証の方法が探究において有益であ

ること、そしてそれは既に獲得された知識の集合を提示する体系的な様式として単なる説明提示においてのみではなく、有益であることを示さなければならない。

これらの背景となる諸条件と諸目的を背にして、アリストテレスは一つの包括的かつ統一的な探究論の文脈の内側で彼の論証理論を展開すべく務めている。彼はその理論が探究のすべての形式に関連する四つの基礎的な問いによって支配されたものとして考えている、たとえそれが経験的なものであろうがなかろうが (II 1)。(そこでは 'S' と 'P' はそれぞれ文法的な主語と述語を表示する)。

- ・「果たして S は P か否か」 (*poteron SP ê ou;*)。 (これは「事実」の探究と言える。例えば「人間は理性的か否か」或いは、より一般的に、「人間が理性的であることは事実か否か」)。
- ・「何故 S は P か」 (*dia ti SP*)。 (これは「理拠」の探究である、例「何故人間は理性的か」)。
- ・「S は端的にあるか否か」 (*ei est S ê mê haplôs* : 間接疑問)。 (これは「存在」の探究である、例「人間は存在するか否か」)。
- ・「S は何であるか」 (*ti esti S;*)。 (アリストテレスのギリシア語に即し、「何であるか」が探究される、例「人間は何であるか」)。

これらの四つの項目は知識を産出する活動のいかなる事例をも汲み尽くすべく網羅的に想定されている、たとえそれが自然科学者の自然探求であれソクラテスの道徳的探求であれ。確かに、探求のいかなる成功理論も可能な限り包括的でなければならないので、探求の可能な対象のあらゆる様式が考察されねばならない。実際、II 巻において言及されている探求の対象は「山羊鹿」のような想像上の存在者や「雷」のような自然現象、「誇り」のような道徳上の存在物や「三角形」といった数学上の存在物、「落葉」のような生物学的事象、そして神学上の存在者「神」も含まれている (cf. II 1, 7, 8, 13, 16)。これらの例から、アリストテレスはとりわけ広く彼の構想を描いていることが実によく見て取れる。このように、彼はあらゆる存在者を包摂すべく、包括的探求論を構築する明白な計画をもっていたことは明らかである。しかしな

がら、そのような包括的な理論が存在しうるか疑われるであろう。結局、探求のすべての種類が発見の同一の道筋にそって進むということを信じるいかなる直截な理由をも持っていない。恐らく、異なる型の対象は還元不能な仕方では他の様式において知られうるであろう。もしそうであるなら、探求のあらゆる形式を包み込む単独の認知体系に従属させることはできない。

かくして、アリストテレスのディレンマは次のものとなる。一方、もしひとが論証の厳密な条件を維持するなら、探究の射程は脅かされる。他方、もしひとが探究の包括的な理論を追及するなら、論証の要求はその一貫性と一般性において過剰な重荷となる。アリストテレスの探究と論証の架橋的な理論は包括的かつ統一的の双方であらねばならず、しかも可能な最も広い領野において科学的知識を産出することのできるものでなければならない。私はこの難問を「包括性厳密性ディレンマ (the comprehensiveness strictness dilemma) (CSD)」と呼ぶ。最も喫緊の問いは、アリストテレスは一方かまたはその他方を犠牲にすることなしに双方の目標を同時に満たすことができるかというものである。もし彼がこの試みに成功しているのであれば、これら二つの計画は範囲と機能双方において互いに強化しあうであろう。私は、彼は私が「発見的論証的探求論 (a heuristic demonstrative enquiry theory) (HDE)」と呼ぶところのものを進展させることにより、この野心的な構想を追求していることを論じる。

これらの二つの目標を達成させようと企てる者は誰であれ、一方でいかに発見的探究が探究の真正な方法たるべく論証の方法の諸主張を妥当なものとして示しつ、いかに論証が探究論において用いられうるのかを明らかにしなければならない。さらに、彼が展開するにつれて、アリストテレスは彼の先行哲学者たちから継承した、最も顕著にはメノンの探究の逆説に代表されている難問をも含め、知識探索に関わる多様な困難に眼差しを向けつつ前進しなければならない。

アリストテレスの探究論は、疑いなく、彼が先行者たちから継承した伝統的な枠組みの内側に位置づけられうる。根源的な様式において、ソクラテスのもの自体への或いは、一層一般的には、事物の同一性への探究は、概して、

アカデメイアにおける探究論の本性と進み行きを決定している。この意味において、ソクラテスは探究のゴールとして厳密な同一性を設定している。彼は諸事物が、それら自身により取り上げられそして他のものどもとの関連においてではなく、それら自体において何であるかを知ろうとしている。こうして、ソクラテスの何であるか (*ti esti*) への探究はいかなる探究の一般理論にとっても成功(ないし失敗)の試金石を提供している。これはアリストテレス自身の探究論にも継承されている。もし探求の行使が射程において限界づけられておりそしてそのような対象ないし項目の知識に導きそこなうならば、アリストテレスの論証理論は射程と機能において魅力的な探究の方法を構成することにはならないであろう。

アリストテレスは彼の論証理論の広範なアカデメイアの枠組みについて十分に自覚している。定義実践の「現今の諸方法 (*kata tous nun tropous*)」のひとつと彼が特徴づけるものはまさにアカデメイアで実践されているプラトンの分割法であり、それは「実体と何であるかの論証を可能にする (*dunaton peri ousias apodeiksin genesthai kai tou ti estin*)」と主張しているものである (*An. Pri.* I 31 46a36f, *An. Post.* II 5 92b19)。アリストテレスの批判によれば、分割法は帰納法に基づきそして事物の因果論的構造を解明するのに或る限定された役割のみをはたすというものである。実に、たとえ分割により存在の秩序においてその結果に先行する根拠を把握するということが起こったとしても、それはその根拠を根拠として把握することはできない。例えば、「人間」が分割法により適切に「可死的な、有足の、二足の、翅のない、動物」(92a1)として定義されたとしよう。分割はこの場合において根拠にヒットしているでもあろうが、それは「二足」または「翅のない」のどちらが因果論的により先行するものであるかを決定できない。これを定義の「先行性条件」と呼ぶ。分割に基礎を置く定義形成句においては、「何故そのようなのか」(91b39)という問いが常に問われうる。そのような定義は定義項の構成要素の一性を説明できない、たとえ当該のすべての要素が、事実上、現存したとしても (cf. 92a29-34, 92b19-25)。これを定義の「一性条件」と呼ぶ。アリストテレスによれば、先行性条件および一性条件の不充足は分割法

の乗り越えがたい欠陥である。というのも論証理論は何がより先行するものであるかを確立する説明論的諸条件を説明せねばならないからである。アリストテレスは、分割法における諸限界を克服すべく、何であるかの探究のそれぞれの対象を特定することによって事物それ自身の一性条件に適合するにいたる彼自身の理論を意図している。この努力において成功するためには、アリストテレスは、いかに何であるかと実体の論証が可能であり、またいかに他のすべての競合理論同様に分割理論に内在する諸欠陥を克服するかを証示することにより、彼の論証理論の優越した効力を示さねばならない。彼が言挙げするこれらの競合理論の諸欠陥は、それらが彼の基礎論理に即して推論化されるとき明らかにされる。

本稿において、私は最初にアリストテレスの探究論が発見的な理論でありそしてそのようなものとして論証理論の射程の内部で科学的知識を産出するものであることを確証する。次に、論証と定義との関係において生じる諸難点を吟味する。とりわけ、もし論証と定義がそれらの対象、述定ないし方法の点で何ら関連性を持たないものであることが判明するなら、彼の全体的な計画は失敗におわるであろう。そこで、私はいかにアリストテレスが何であるかの論証を構築すべく企てているかを探索するであろう。最後に、彼の新しい定義論を分析することにより、どれだけ彼が発見的論証的探究論(HDE)の展開において成功したかを吟味する。

2. 発見的探求論

アリストテレスは、その対象が世界におけるあらゆる現実の事物、事象への包括的な探求論を構築しようとする。彼は学習されかつ知られるべき諸事物として四つの項目を同定している(89b24)。

- ・ [I a] 事実 (*to hoti*) と [I b] 理拠 (*to dioti*)
- ・ [II a] 存在 (*ei esti*) と [II b] 何であるか (*ti esti*)

決定的なことは、探求の過程はトラック(行路) [I] に沿って [I a] (事実) から [I b] (理拠) に至るか、或いはトラック [II] に沿って [II a] (存

在) から [IIb] (何であるか) に至るかのいずれかである。探究はこれらの項目に対応する問いを追跡することによって前進し、そしてひとは世界にある事物、事象の四つの状態の一つかそれ以上のものを発見するとき、探究は止む。彼は「月が蝕を蒙っていることを発見することによって、われわれは探求を止める」(89b27)と言う。これは既に [Ia] 事実と相関的に探求があることの証拠であるが、そのことは、今度は、発見の概念が彼の探求論のなかで鍵となっていることを示している。従って、この理論は一つの発見的探究論であるということが帰結する。

アリストテレスは、これら四項目は探求の項目と射程の点で汲み尽くし網羅的 (exhaustive) であり包括的であると考えており、そして彼の理論の包括性に関して確信を渗みださせている。知識を求めるものはこれらのうちいずれかを求めている。探求の包括性は「われわれが探究して、そして発見することにより (*heurontes*), 知ることはこれらのものでありこれだけの数である」(89b36f)と説明されている。換言すれば、何であれ発見されうるものは探究のこれらの四項目の一つに分配されうる。彼の四つの基本的な問いは、かくして、われわれがどの疑問詞を用いてであれ尋ねることができるいかなるものをも包摂すべく意図されている。

一見すると、われわれは事実性と存在に関する問い [Ia] と [IIa] を判別されるものとして認めるべきか明らかではない。最初のものは何ものかのそうであることの実関わり、第二はその存在に関わる。アリストテレスはこれらの問いを構文上 (syntactically) 二つの副詞的規準それぞれ「端的に」と「部分的に」を導入することによって、[IIa] 存在の問いを [Ia] 事実の問いから体系的に区別している。アリストテレスは述べる。「私は「事実 (*to hoti*)」によってまたは「あるか (否か) (*ei esti*)」によって「部分的に」そして*「端的に」と言う。(i) 一方で「部分的に」によって私は、例えば「月が蝕を蒙っているか、それとも満ちているか」を探求する。何故ならこのような場合、それは何かであるか、何かでないかを探求しているのだから。しかし (ii) 「端的に」によって、私は「月または夜があるかあらぬかを探求している」場合を言う」(90a2-5 : Bekker に基づく。[*「或いは」 : Waitz])。

このように彼はそれぞれの問いをその焦点を明確にすべく規制している。私は、言葉における単一の使用と複合の使用との間の構文上の違いによって与えられるこの規準を [Q1] と呼ぶことにする。

アリストテレスは、「Sは端的にあるか？」(ここでSとは文法上の主語を指している)が「Sは白であるか否か」(89b34)と対比されうることを説明する。この区別は事実の問いがあるのと同様に、存在の問いがあるということを確認するために言語上の観点から設定されている。例えば「夜」は「暗闇は空気に属するか否か」と再構成されるでもあろうが、「端的に」とアリストテレスによって限定されている(90a5)。何故なら彼は、ひとは日常的に「夜」や「蝕」(90a26)という単一の言葉を用いて存在を尋ねるということに注意を向けつつ、言語上の現象に忠実であるからである。この文脈において、Sの内容は問題とはならない。D・チャールズの語るように、当該の区分は「問いの形式に依存している」⁽⁹⁾。いかなる事物、出来事も単称項により言及されうる限り、ひとは存在の意味において「Sはあるか」を尋ねることができる。これは、端的に、Sは存在するか否かを問うことである。

この言語上の区別が [Ia] 事実と [IIa] 存在は実際異なる問いであるということを示している。「月は蝕を受けない」という否定の主張は、基体である「月」の存在の否定を導かないし、「蝕」という当該の状態それ自体の否定をも導かない。何故なら月は蝕なしに存在するでもあろうし、蝕は他の惑星に属しているでもあろうからである。このケースで否定されているのは、主語と述語によってそれぞれ意味表示されている二つの項の間に妥当している「部分的に」と呼ばれるつながりである。それとの対比で、項の単一の使用のケースにおいて、「月」や「夜」といった単一の主語項が用いられるとき、否定されているものは事物それ自身の存在である。かくして、ひとは何ものかのそうであるという事実を、それによって(想定される)事実において含意されている事物の存在を否定することなしに、否定することができる。「(それ)である」は事実性に関わり、「あるか(否か)」は存在に関わっている。

探求者はこれらの論点の一方を他方と混同すべきではない。これらの限定の導入がなされているのは、発見的知識の異なる型を分離すべく、トラック

[I] はトラック [II] から区別されねばならないことを示すためである。[I a] 事実の知識は探求者をして [I b] 何故この事実は成立するのか (理拠) を尋ねるよう促すことは明らかである。ひとは [I a] 事実の知識に基づき [II b] 何であるかを問うことはできない、何故なら前者は部分を伴い分節される項目だからである。同様に、それが存在するという [II a] 存在の知識から [II b] それは何であるかを尋ねることは自然である。しかしながら、これら二つのルートにおいて同時に [a] と [b] 双方を発見することを妨げるものは何もない (e.g., 93a17, 35)。一般的に、何であれ語「発見」が語りかけられるいかなる事物、事象も彼の探究論の対象である。そのとき、発見の項目の数は四つである。従ってこれはそのために発見的探求論が構築されうるケースの範囲である。

この枠組みのなかで、アリストテレスは発見的探究の言語と論証の言語のあいだに連関を確立することを求める。彼の発見的探究論を執行することにより、アリストテレスは探究の対象を基礎づける因果論的連関を探索している。そして論証の一般的な形式に依拠しつつ、彼は一つの推論のうちで中項を根拠として同定する。こうすることによって彼は二つのトラック [I] [II] を統一している。

われわれは、[I a] 「事実」または [II a] 「それが端的にあるか」を探求するとき、そのときはいつでも [I & II a] 「はたしてそのものの中項はあるかそれともあらぬか」を探求している。しかし、われわれは「事実」か「存在」を、それは [Q1] 「部分的に」または「端的に」ということであるが、知るにいたり、そして今度は [I b] 「理拠」と [II b] 「何であるか」を探求するとき、そのときはいつでも [I & II b] 「その中項は何であるか」をわれわれは探求している (89b37-90a1)。

この一節で、中項によって表された推論または論証は発見的探求の言語のなかに組み込まれている。彼は一つのトラックを他のトラックに還元するのではなく、むしろこれら二つのトラックは確実に真正の通り道を指示してい

ると捉えている。これは何故ならそれらが、[I & IIa] から [I & IIb] へと
いう、背後の探究過程によってそれぞれ保証されているからである。彼は [I]
と [II] の包括的な対処法を提示すること、そしてそのようにして、探究の
統一的な過程の観点から、それらを [I & II] によって秩序づけることを試
みたのである。

[I & IIa] と [I & IIb] を導入したことによって、アリストテレスは [I]
と [II] のそれぞれの項目 [a], [b] はひとつの統一的探求における同一の
段階を構成すると捉える。これらのトラックの同一化は項目「事実」「存在」
「理拠」「何であるか」が何を意味表示するかについてのアリストテレスの理
解を提示している。中項、すなわち根拠の存在を知ることなくして、ひとは
事実の知識または存在の知識を主張する資格はない。そして中項「M」によっ
て意味表示される具体的な項を知ることなくして、ひとは理拠の知識または
何であるかの知識を主張する資格はない。探求の四項目の理解に対するこの
制約は、探究の論証的知識に至る彼の全体的な計画における先述の二つの目
標を満たすという彼の理念に由来している。彼の関心は「いかに描写された
型の探求が彼の証明理論に適合するか」⁽⁴⁾ だけでなく、いかに彼の探究
論は包括的かつ統一的な探求論を構築すべく彼の証明理論を利用することが
できるかにも注がれている。論証が科学的探索において何らかの役割を担っ
ているのでなければ、それは公理論的演繹体系として理解される論証科学の
内部で、前提から結論への必然性の単なる伝達者となるだろう。論証がより
大きな力を持つのは、それが世界、それは疑いなく発見的探求の対象である
が、その世界に組み込まれている説明的構造を反映する限りにおいてである。

当該論証の発見は統合トラック [I & II] の導入を目指している。一つの
中項 (*meson*) があることを発見した後に、探求者はその中項 (*to meson*)
が何であるか、すなわち何が具体的な中項であるかを求める。アリストテ
レスはこのアプローチを蝕のケースにおいて明らかにしている。彼は「A [蝕]
が C[月]に属していることが明らかであるときは、次に何故それが属するの
かを探求することは、B [=M]は何であるか、はたしてそれは光の遮蔽か、
月の回転か、消滅かを探すことである」と言う (93b3-6)。すなわち、[I &

IIb) 「その中項 [M] は何であるか」という問いにおいて、彼は「Sは何であるか」を尋ねることによって M は何であるかに向かわせている。一方で [II b) 「何であるか」の問いは今や因果論的なものとなりそして S をして Sは何であるか [それがそれであるもの] たらしめる根拠を尋ねることと同一視されるが、[I & IIb) の問いは S の存在の適切な根拠としてか SP [S が P である] という事実の適切な根拠のそれとして看做されている。その適切な応答は何故 SP なのかという理拠を説明する、そして同様に S が何であるかを決定する。[I & IIb) のこの同一化の故に、われわれは何であるかと何故かは同一であると語る資格を得る。[I b) 理拠と [IIb) 何であるかのこれらの問いによって、探求者は実際 [I & IIb) を尋ねている。これが彼の発見的探求の論証的なまたは因果論的な解釈の基礎である。

続いてアリストテレスは協和音や蝕の諸事例に言及することによって「何であるか」と「何故か」の問いの同一性のための議論を展開し、そして当該の根拠がそれぞれに内属する探求の対象の三つの種類を区別するために一つの存在論的な規準「端的に (*haplôs*) vs 或るもの (*ti*)」を提起する。私はこの存在論的規準を [Q2] と呼ぶ。この規準により識別される三つの対象のそれぞれを私は (So), (Po) そして (Ao) と名付ける。それは実体的な対象 (So) と自体的な対象 (Po) と付帯的な対象 (Ao) である。

何故なら中項 [M] は根拠であり、あらゆる場合にそれが探求されるからである。「それは蝕を蒙っているか」、「何か根拠はあるかあらぬか」。「何かがある」ということを知ったうえで、われわれは「それ [M] は何であるか」を探求する。何故なら中項は [Q2] これまたはあれであることの根拠ではなく、(So)端的に実体であることの根拠であるか、または (Po) 端的にではなく、その自体的な諸属性の或るもの (*ti*) であることなのか、それとも (Ao) その付帯的な属性の根拠であるかだからである。ところで私は「一方、端的に (*to men haplôs*)」によって基体、たとえば月、地球、太陽、三角形を意味している。それに対し「他方、或るもの (*to de ti*)」によって蝕や等辺、不等辺、[地球が] 中間にあるかない

かを意味している。何故ならこれらのあらゆる探求において、それが何であるかとそれが何故であるかが同じであることは明らかだからである。「蝕は何であるか」、「それは地球の遮蔽による月からの光の消失である」。「何故蝕はあるのか、或いはむしろ、何故月 [*hê selênê*] は蝕を蒙るのか」。「何故なら地球の [*tês gês*] 遮蔽することにより光 [*to phôs*] が消失すること [*to apoleipein*] の故にである」。^[IIb]「協和音は何であるか」、「それは高音と低音の間の数の比である」。^[Ib]「何故高音 [*to oksu*] は低音 [*to baru*] と協和するのか」、「それは高音 [*to oksu*] と低音 [*to baru*] が数の比 [*to logon arithmôn*] を保つことの故に」。「はたして高音 [*to oksu*] と低音 [*to baru*] が協和することはあるか」、^[I & IIa]「諸数におけるこれらの比はあるか」。われわれはそれがあるということを掴んだ後、^[I & IIb]「それではその比は何であるか」と問う (90a6-23)。

彼の議論は専門用語によるものであるが、アリストテレスはここで「何故？」の問いと「何であるか？」の問いとの同一性を主張する帰納的な議論を提示していることは明らかである。われわれがここで持っているのは或る意味で、「Sは何であるか」という伝統的なソクラテスの問い、本質的な定義を求める問いの因果論的な編成に従属しているケースである。実際には、因果論的な解釈は^[I & IIb]に基礎づけられたものとして、^[IIb]「何であるか」と^[Ib]「何故であるか」の問いの同一化によって可能なものとされている。推論用語における中項は定義を構成すべく利用されている。私はこれを「何であるかの因果論的転回 (又は「編成」)」と呼ぶ。しかしながら、「何であるか」の問いと「何故であるか」の問いに答える方法の相違には重要な対照がある。これはアリストテレスが依拠するものは一見不格好に聞こえる言い回しになっているのではあるけれども、彼の言語使用上の正確性に反映されている。「何故？」の問いが答えられるとき、選ばれた項は定冠詞「それ (*to*)」によって先行されている (上の引用ではギリシア語の引用により名詞とその定冠詞を表示している) (cf. 90a7-21, 93a37-39, 93b10-11, 94a4)。知識

を生みだす推論の形成における項の選択は実在における包括的厳密的探求論 (HDE) の途上の過程を反映している。実際、アリストテレスはこの過程を提示するとき、ひとは、一つの推論を形成することなしに、当該の中項を見いだすことはできない。論証における明白な定冠詞の付加、定義におけるその欠如は、一方知識を産出する推論は言語上の活動に留まるが、他方推論上の諸項の選択に基づく定義は直接的に世界における事物、事象についてのものであるということを示唆している。われわれはまさにこのタイプの探求の諸事例を『分析論後書』II 8 の考察において見るであろう。

アリストテレスは、事物、事象の存在論的な特徴から [I & II] に基づいて探求 [I] と [II] の理解を提示している。われわれが知っていると主張する世界は次の三つの種類からなる。(So) 実体 (基体), (Po) その必然的属性そして (Ao) その偶然的属性である。これらはそれら自身の存在の根拠を持つと語られる。規準 [Q1] (「端的に」そして「部分的に」) は言語次元で機能する一方で、新しく導入された規準 [Q2] (「これやあれであることではなく、端的に」と「端的にではなく、或るもの」) は実在の次元で存在論的な制約として適用される。この存在論的規準 [Q2] は言語的規準 [Q1] から区別されるべきである。一方 [Q1] は探求者がそこにおいて問いを産出するその諸様式に関するものであり、[Q2] は見出された対象がそこにおいて相互に異なるその諸様式に関するものである。

「存在 (*to on*)」と「実体 (*hē ousia*)」は異なる仕方において語られるので、句「これやあれではなく、(So) 端的に実体であること」は「端的に」によって制約を受けその結果それは独立の基体を端的に意味表示する。かくして、「実体」はここでは「基に置かれているもの」であると看做される。規準 [Q2] はその四つの項目が知られると想定されるところの探求の三つの種類の対象を提供する。探求者はこれら三つの種類の対象のうち四項目の知識を得るために探索する。一方探求の二つの項目は統語論的に区別されるが、探求の二つの種類の対象は存在論的に区別される。或る諸事物は或る「基にある」基体にそれらのあることを依存することによってのみ存在することができる。一方基に置かれる実体の事例は、月や太陽、三角形であり、自体的属

性の事例は（月の）蝕や（三角形の線の）等辺や不等辺そして（地球の）中間にあることあらぬことである。これらの事物、事象は中項の位置を占めることのできる根拠を持つ。この様式において、アリストテレスは独立した基に置かれるものであるという意味における実体を含めた事物、事象のこれらのあらゆるタイプにとって、知識を産出する推論を持つ可能性を開いている。推論の諸項が発見の対象に組み込まれるので、論証理論は統一的な科学的究明において現実的な役割を演じることができる。

たとえそうであるにしても、しかしながら、註解者たちは常のこととして [Q1] から [Q2] を区別しそこねてきた⁽⁵⁾。その結果、この失敗を考慮にいれるとき、多くはトラック [II] を [I] に還元し、そしてこうして探求の射程を制限しかつ狭めたのであった。ことに、註解者たちはいかに実体への発見的探求が進展するかを評価することに失敗している。現に、いかに単称項で表現される実体のような独立した存在者が推論の諸項に分析されうるのかに関して問いが生起している。トラック [II] は、存在の端的な使用に基づくが、論証の枠組みの内部で対処されえないように見える。その結果、ひとはトラック [II] における実体に対し結局異なる方法を期待することにもなる。さもなければ、実体はアリストテレスの探求論から排除される危険にさらされる⁽⁶⁾。

アリストテレスがこの危惧にいかに対処するかを見るために、われわれはまず註解者たちの [Q1] から [Q2] を区別することの失敗は、事実上、元来の包括性厳密性ディレンマ (CSD) の一方の角の餌食になる一つの様式であることを正しく見究めなければならない。探求の四項目は探求の三つの対象のそれぞれにおいて探索されなければならない。そこでは探求の領域は解説的、提示的な (expository) ものよりも発見的な (heuristic) ものとして留まっている。探求のこの枠のなかで、ひとは当該の言語的区分に基づく探求の四つの項目に関する厳密な知識を求めるべきである。なおこの探求の形式はその射程から実体、統一的な独立存在者を排除すべきではない。さらにそれはトラック [II] を [I] に還元するべきではなく、また [I] と [II] を [I & II] に還元するべきでもない⁽⁷⁾。

アリストテレスは彼の発見的探求の構想を厳密に固守することによりこの危惧の突破口を見つけている。実体であれ属性であれ、或る存在者を発見するとき、ひとは当該の存在者の単なる存在を発見するのではなく、常にその「付带的」属性や「それ自体の或るもの」を伴っている (93a22)。彼は「われわれは [IIa] あるということ (存在 (*hoti esti*)) を把握する程度に応じて、そのようにわれわれは [IIb] 何であるかを見出す状態にある」と言う (93a28f)。アリストテレスは申し立てられた諸困難さにかなる問題をも見出しはしていない、なぜなら彼は発見的な知識、情報の豊かさに基づいて彼の探求論を構築しているからである。どんな対象も、当該の問いが文法上の主語として置かれた単称項の様式によって尋ねられている限りにおいて、トラック [II] により探求されうる。ひとは [I] と [II] のどちらかのルートを取ることができる、というのも [Ia] と [IIa] の発見は常に [Ib] と [IIb] の発見に導く情報の他の諸断片によって伴われているからである。さらに、[Ib] と [IIb] は [I & IIb] (その中項は何であるか) の基礎において理解される。われわれは今や CSD の一つの角の主張を片付けられうるのを見る。発見のうちに含まれる情報の豊富さがアリストテレスをして発見の領域において諸論証を展開することを許容している。

これらすべてをひとまとめに語るなら、われわれは発見的探究の射程、過程そして対象に関する次の図式を考案することができる。そこでは、項「S」「P」「M」は言語上の規準 [Q1] 「端的に」-「部分的に」のもとにあり、そしてこれらは存在論上の規準 [Q2] 「端的に」-「或るもの」のもとに世界にある三つの対象 (So), (Po) そして (Ao) のあいだから選ばれる。対象 (So), (Po) そして (Ao) の或る一つのことを意味表示する項「S」「P」「M」のそれぞれは変項として理解されねばならず、その結果トラック [I] 「SP」における「P」によって意味表示される探究の対象はトラック [II] における「S」によって表現されうる。それらが構文上区別される限りにおいてそれは可能である。

[a]

[b]

[I] S は P に部分的にあるのか否か? → 何故 S は P であるのか?

[II] S は端的に存在するか否か？ → Sは何であるか？

[I & II] 中項 M は存在するか否か？ →その中項 Mは何であるか？

しかしながら、これまで脇に於いてきた包括性厳密性ディレンマ (CSD) のもう一つの側面がある。もし発見が感覚知覚によってのみ実現されるとするならば、ひとは探究を通じて厳密な (strict) 知識に到達することはできない。探求においてただ感覚知覚だけが唯一の探求において利用可能な認知機能であるなら、われわれはディレンマの他の角の餌食になる。アリストテレスの探求の全体的計画においては、すべての探求は本質的に中項を巻き込むものである。彼は「その中項が知覚しうるものであるケースが、探求は中項についてであることを明らかにしている」と述べる (90a24)。彼は月の上立っているひとによって見られる月の蝕の感覚知覚の例を挙げることによってこの主張を提示する (90a26)。これは、その現実世界への方向づけを示しつつ、彼の発見的論証的探求論 (HDE) における実際上の探求者の場所の重要性を例証している、もちろん当時においては思考実験であったのではあるが。この場合、もし観察者が月の上にいるなら、感覚知覚の事柄として光の喪失と地球の遮蔽の双方が生起していることが同時に明らかになるであろうことを彼は示唆している。というのもこれらの生起の双方は、その特権的位置から、知覚可能な事実であることを証明しているからである。たとえそうであるにしても、しかも重要なことに、事実上 (in fact) 遮蔽を把握することは、それを光の喪失の根拠として (as) 把握することと同じではない。観察された事実はさらに根拠として把握されるべき何ものかを要求している。

後者即ち何かを根拠として把握することは、知覚機能よりもむしろ思考を、洞察機能 (*noēσαι, theôrein*) を要求するが、それは、実際、普遍的な命題を生み出しそしてそのように固有な論証の身分を獲得させる (cf. 71a1, 79a24, 81b2, 86a29, 88a3, 16, 89b12)。ちょうどニュートンが木からりんごが落ちるのを見ることによって重力の法則を掴んだように、「知覚することによってわれわれは普遍を知るようになる」(90a28)。アリストテレスが語るように、「洞

察力 (*ankinoia*) は気付かれぬ時間のうちに中項をヒットする才能である。例えば月が太陽に向かって明るい面を維持していることをひとが見れば、直ちにこれが何故であるかを理解する場合のように」と彼は言う (89b10f)。感覚知覚によって媒介されることにより、「洞察対象 (*noêtê*) である普遍」は他の心的能力によって把握されるだろう (86a29)。彼が頻繁に同時発見について言及した理由は、二つの異なる認知機能が同時に発動しうるからである (90a27, 93a17, 35, 88a16, 89b12)。これらの特徴を伴って同時に論証を把握することを妨げるものは何もない。他の心的機能を導入することによってのみ、包括性厳密性ディレンマ (CSD) を乗り越えることができる。

実際、アリストテレスは「事象がこのように適切に理解されたので、天文学の諸論証が発見された (*heurethêsan*)」(46a20f) という文脈のなかで、論証の発見について述べている。これは驚くべきことではない、なぜなら中項を発見することは論証全体を明らかにすることだからである。それ故に、われわれは中項の知覚によってはわれわれの探求を完成することはないであろう。われわれは普遍の或る思考をもまた必要としている。

文脈は新奇なものであるが、アリストテレスがここで維持していることは、実際、論証の標準的な特徴である。論証は普遍性の条件を満たす二つの必然的前提によって構成されなければならない。アリストテレスは言う「私が「普遍」と呼ぶものは何であれその主語に (U1) すべてに、(U2) 自体的に、そして (U3) そのものである限りにおいて、内属しているものである」(73b25-27)。理想的な論証の前提は何であれこれら三つの条件を満たさなければならない。四種の自体的述定が存在するが、そのすべてが一つの論証科学の構成要素である⁽⁸⁾。第一の、「自体的述定 1」は次のものである (世界の事物は A, B により、言語表現は「A」「B」で表記する)。自体的な要素 A は B が何であるかの次の様式において要素である、即ち A が B に属しており、「A」が「B」は何であるか」において内属している (または、述語付けられる) という様式において。例えば、線は三角形に自体的に内属している。点は線に自体的に内属している。自体的性の第二の種類「自体的述定 2」は次のものである。或る要素 A が B に内属しており「B」が「A」は何であるか」において

内属している(または述語付けられる)。例えば、直と曲は線に自体的に内属している。偶と奇は数に自体的に内属している(73a34-39)。一層十全に語るなら、命題「二直角はすべての二等辺三角形に内属している」は、真であり必然的であり(U1)全称量化の条件を満たしているが、(U2)または(U3)を満たしていない。その命題の必然性は部分的には「二直角はすべての三角形に自体的に、そしてそのものである限りにおいて、属している」という前提から伝達されている。二直角は二等辺三角形に属するが、二等辺三角形である限りにおいてではなく三角形である限りにおいて属しているが、その三角形は二直角と外延を等しくししかも「二直角は何であるか」について述語付けられるもの(「自体的述定2」)である。(U3)「そのものである限りにおいて」という条件は相互に述語付けられうる諸項のあいだに外延を等しくする普遍を裏付けている。同様に、月の上の探求者は直接に普遍的論証を発見するであろう。

大前提：蝕は地球によって遮蔽されるすべてのものに属する。((U1), (U2) 自体的述定2, (U3))。

小前提：地球によって遮蔽されるものは月に属する(種Kのすべての月)。(U1), (U2) 自体的述定2(「地球によって遮蔽されるもの」は何であるか)の説明において、種Kの月は必然的に内属する、ただし「K」はこれこれの軌道における等々の衛星を意味表示する)。

結論：蝕は月に属する(種Kのすべての月)。(U1)と大前提、小前提における必然性故の必然性(cf. 93a30-37)。

これはアリストテレスの発見的探求論が論証を掴むことを目指すものであることを確立している。言い換えれば、論証は探究の結果の表現というよりもむしろ発見的探求の文脈の*内側*で理解される。この例はどのような仕方で彼の二つの目標が密接に関連しているかを示している。

3. 定義と論証

これまで私はアリストテレスの探求論の全体的な構想を辿ってきた。探求の対象は世界内のすべての事物に広がる。これは驚くべきことではない、というのも何であれ事物はアリストテレスのこれら四つの問いの一つによって吟味されるからである。たとえそうであるにしても、彼の野心的な計画はアポリアに取り囲まれている。喫緊の問いは彼の「何であるか」の因果論的解釈は正当化されるかというものである。[I & II a, b] による探求の四項目の彼の理解は事物や事象のどんなものにも適応させることができるのか。われわれは既にはたしてそれはその対象のなかに諸実体を含むのであろうかということに関し心配すべき理由を与えられている。もし実体を包摂しそこねるならば、アリストテレスの HDE は包括的なものではなくそしてそれ故に失敗に終わるだろう。

幸運にも、アリストテレスは充分にこのありうる困難に気付いていた。彼は II 3 から II 7 にかけてこの問題そして他の関連する挑戦や難問に直面している。これらの章において、アリストテレスは、定義と論証双方とも厳密な知識獲得のための媒体であると彼は主張するが、それら定義と論証のあいだの関係に取り組む。「S は何であるか」と「何故 SP であるのか」（つまり「或る基体は何であるのか」また「何故或る基体は或る特徴を持つのか」）の間の同一性に基づく彼の HDE は定義か論証いずれかの方法の内側でこれらの項目を統一しなければならぬ。アリストテレスは II 3 において [A] 定義と [B] 論証に関わる幾つかの難問に取り組むが、彼はそれを(1)それらの対象と項目、(2)それらが用いる述定、(3)それらの方法についての難問を提示することによって遂行する。

(1)に関して、アリストテレスは一方 [A] 定義は (1a1) 「何であるかそして実体」に関するものであり、[B] 推論または論証は (1b1) 「自体的属性と付帯的属性」に関するものであるとする。さらに、一方、定義は (1a2) 「何であるかを証明する」ものであり、論証は、他方、(1b2) 「[何が何かで] あ

るということを証明する」。すなわち「これがこれについてある」とか「あらぬ」とかを証明する。最後に、論証は(1b3)「何であるかを前提しました仮定する」。

(2)に関して、アリストテレスは、一方[A]定義は(2a1)全称かつ肯定的な命題であり、しかもそこにおいては、(2a2)「或るものは他のものによって述語付けられない」ものであるが、[B]論証は(2b1)基礎論理の制約により否定的な命題をも含み、そして(2b2)「或るものについて或るものを証明する」。言語レベルにおける「何であるか」のあらゆるケースは(2a3)「普遍的かつ肯定的な述定」によって構成されている。

(3)に関して、[A]定義は「帰納に基づいた充分な信頼」を伴う知識を得る一方、[B]論証は演繹的な推論を要求する⁹⁾。これらの論争点に付随する諸困難を克服しない限り、「何か?」と「何故か?」の探求を統一するアリストテレスの計画は頓挫するであろう。

この点に関し、何であるか或いは実体の推論ないし論証を持つ可能性を究明することはアリストテレスにとって不可欠である。もし彼がこの究明に成功するなら、論証と定義は両立可能なものとなるであろう。それにふさわしく、アリストテレスはこの関連で一連の問いを提示している。

- ・いかにひとは何であるかを証明するか? (90a36)
- ・いかに定義者は実体或いは何であるかを証明するか? (92a34)
- ・何であるかの推論と論証はあるかあらぬか? (91a13)
- ・実体に即した何であるかの論証はあるか? (92a6)

彼はII 3からII 10の間で合わせて九回同様の問いを提示している (cf. 90b19, 92b4, 93a2, 15, 94a15)。アリストテレスが「実体」そして「何であるか」或いは「何であったかということ(本質)」を一つの文脈において提示し考察するとき、彼が何を達成しようとしていたのかを究明したい(91a25, 91b9, 92a6)。なぜ彼はこれらの語句をHDEにおいて用いたのか。その応答はアリストテレスの彼の先行哲学者たちとの関係にわれわれを連れ戻す。彼が含意していることからは、もしひとがソクラテスの探求に付きまとう困難を避けうとするなら、ソクラテスの「Sは何であるか」の問いは適切に分節

されなければならないということである。これがそうであることを想定するひとつの理由は『トピカ』における彼の実践に由来する。実際、アリストテレスが HDE で使用する専門用語は『トピカ』I 巻の弁証術の理論に由来している。そこでは「Sは何であるか」の問いを彼はプレディカビア(述語付け可能なもの)と述定の理論の術語において分析している。そこで論じられている四つのプレディカビアのうち一つは何であったかということ(本質: *to ti ên einai*)を意味表示する「定義形成句(*horos*)」と呼ばれる説明言表の一種である。実体範疇をその中心に含む存在者の十の範疇はプレディカビア論に基づく述定の範疇(*ta genê tôn katêgoriôn*)の分析に即して区別される(103b20ff)。私見では四つのプレディカビア、十の述定の類・範疇、そして十の存在者の類・範疇のあいだの彼の区別はすべてソクラテスの「Sは何であるか」という問いのアリストテレスによる異なる様式における分析の結果である⁽¹⁰⁾。それらは弁証術の**実践**のための理論的考案物であり、その実践は、「何であるか[を問うこと]なしに(*khôris tou ti esti*)」「はい」か「いいえ」を述べることによって答えられる疑問詞を用いて遂行される(*Met. M 4 1078b26, cf. Top. I 4 101b28-36, VIII 2 158a14-24*)。

アリストテレスがこれらの語句を一緒に提示するとき、われわれが [Q1] と [Q2] の間の区別で見てきたように、彼は言語上のレベルと存在論上のレベル双方を念頭においており、そしてそれらの間の対応を示すことを目指している。「Sは何であるか? (*ti esti*;)」の問いは言語上の問いでありそして「Sは何であるかということ (*to ti esti*)」という語句によりもたらされるその応答もまた言語上対象を同定することにより表現されるであろう(cf. 90b4)。このタイプの言語上の活動は通常指示の役割を有している。即ち、「Sは何であるかということ」は実在を意味表示する。われわれがこの言い回しを見いだすとき、われわれは言表により S を同定するという言語上の活動は実在において S が何であるかを見出すべくわれわれを方向づける。われわれの文脈では、アリストテレスは「実体は何であるか」をこれら同一の語句により伝達している(91a25, 92a6)。この文脈における彼の関心はまさに実体が何であるかの論証が存在するかどうかということである。

『トピカ』I 9におけるアリストテレスの意味表示の二重の機能 ([1] [2]) の説明によれば、カリアスは何であるかを意味表示する言語行為はまた一つの実体を、即ちカリアス彼自身を意味表示している。アリストテレスは言う、「[1] それは何であるかを意味表示する者は、[2] 時には実体を、時には性質を意味表示している (*ho to ti esti sêmainôn hote men ousian sêmainei*)。…一人の人間 [カリアス] が或る人の眼の前におかれるとき、そしてそこにおかれた者は人間であるとか動物であるとか言うとき、彼は [1] それ [カリアス] が何であるかを語り (*legei* (states)), そして [2] 一つの実体を意味表示している (*sêmainei*)」(103b27-31)。私の見解では意味論上の概念「意味表示する (*sêmainein*, signify)」がこの文において使用されているのは、一つは「何であるか」を述べる言語行為を伝達するためであり、ひとつはその行為によって意味表示される実体を指示するためである⁽¹¹⁾。この二重の機能は疑いなく『形而上学』においても機能している。彼は、例えば、「ある」は [1] 何であるかそして [2] 或るこれ (*tode ti*) を意味表示する」と述べている (Z 1 1028a12)。

「何であったかということ」が「何であるかということ」と「実体」の両者と共におかれるとき、前者は後者の二つをより厳密に限定する (91a25, b9, 26)。『トピカ』I 4-9でアリストテレスは「Sは何であるか」の問いにより求められているものが何であるかを、アカデメイアにおける分割法との関連において展開されたプレディカビアと述定の理論により、究明されうることを確立した。彼のプレディカビアの理論はソクラテスの「Sは何であるか」の問いに対する四つの可能な応答により構成されている。彼は当該の事物 S と S について述語付けられうる事物の種類のあいだに同一性の四つの型としてこの問いに対する四つの可能な応答に言及している。それは「付帯性」、「固有性」、「類」そして最後にそれだけが「何であったかということ」(本質)を意味表示する「定義形成句」という四つである。これらすべては「定義的 (*horika*)」と呼ばれるが、これら四つの可能な応答はソクラテスの「Sは何であるか」の問いに対するあらゆる可能な応答を汲み尽していること、そしてかくしてこの問いに利用できる諸応答の相互に排他的な分類を提供すること

が想定されている (102a9)。例えば「勇氣とは何であるか？」の問いに対するラケスの答えは「戦場の前列で後退しないこと」であった (*Laches* 190e)。しかし、臆病さのゆえに足がすくみ動くことができないことがその根拠であるかもしれないため、この句は単に付帯的な勇氣の特徴を意味表示しているにすぎない。「本質 (*to ti ên einai* S)」という言い回しは、私の見解では対話者の最初の答えに満足しないソクラテスが S それ自体を再び尋ねる状況において「S は何であるか」の問いを再び問う試み、問い直しの様式から形成されている。これは文字通りには、「S にとって S であることは一体何であったのか？」という未完了時制を伴うギリシア語の言い回しにより伝達されているものである⁽¹²⁾。「それは何であったかということ」はソクラテスが彼の「S は何であるか」の問いにおいて求めるものをアリストテレスが再び明確に述べているものである。この定式化はアリストテレス自身の一層省略された表現「何であったかということ」という表現に道を備えている。即ち、そのとき、S にとって S であることは何であったかということ、例えば、人間にとって、人間であることは何であったかということ、或いは勇氣にとって勇氣であることは何であったかということである (103a25-27, cf. 1041a28)。四つのプレディカビリアのなかで、定義形成句のみがこの種の応答を提供する。この意味において、本質は定義可能な存在者の形式的な概念として導入されている。

『トピカ』I 9 において、アリストテレスは「それは何であるか？」や「それはどのようにあるか？」という当該の疑問詞の種類に従って分類された十の述定の範疇 (類) を基にして実体や属性といった存在者の十の範疇を枚挙している。「何であるか」という同一性の問いは存在者のそれぞれの範疇に投げかけられる。実体語は実体語によって定義される。同様に性質語「白」は性質語「色」によって定義される。これら十の存在者の類のうち、「何であるか」は第一に実体に宛がわれる。一方他の存在者は、ひとつのものが別の基体について述語付けられるところでは、「人間は白い」のような「他己 (*peri heterou*) 述定」を受け入れるが、実体だけは「自己 (*peri hautou*) 述定」しか受け付けない (103b35-39)。これは何故なら、例えば、「白は人である」と

いう述定において「人」は白が何であるか、また白がどのようにあるかも、さらに他の述定のいかなる類も意味表示しないので、この種の他己述定は何ら有意味なものをもたらしなからである。かくして、この種類の述定は存在者の十の類のうちの一つをもまた意味表示しない。われわれは今や「本質[ものそれ自体]は第一にそして端的に実体に属するだろう」(1030a29f)というような『形而上学』の諸節を理解するより良い立ち位置にいる。われわれが後に確認するように、これは『分析論後書』において展開される説明の因果論的な対処に由来している。

『トピカ』においてすでに本質の因果論的な編成の指摘が存在する、ただし事物を同定する論点の一つのトポス(吟味の論点)に留まっているのであるが。『トピカ』VI 13において、本質は三つの候補の間で一つの可能性として提示されそして吟味されている。彼は「或るものを定義するさいに、はたしてひとはそれを [a] これらのもの、或いは [b] これらからできているもの、或いは [c] このものをこのものと一緒にしたものとして定義したかどうかを調べなければならない」(150a1-3)と述べている。一方 [a] は「正義」を「節制と勇気」とするような要素の単純な付加により形成され、[c] の例は「蜂蜜水」である。しかし [b] は『形而上学』における質料と形相の合成体に導く種類の、因果論上統一された存在者の可能性を開いている。アリストテレスは [b] に関わるトポスを提示している。「ひとがそれらの合成の様式を述べそこねたかどうかを見なければならない。何故なら、それらがこれらの要素から形成されていると言うことは事物を可知的なものにするためには十分ではないからである。というのも、諸合成体のおのおの実体は、単にそれがこれこれの要素からできているということではなく、それは、ちょうど家におけるように、これこれの要素からこの様式で、できているということだからである」(150b22-27)。

『分析論後書』において、それは概して『トピカ』を前提にしているが、アリストテレスは『トピカ』において [b] のもとに提案された方向性に基づき何であるかと実体の因果論的な解釈を発展させることに取り組んでいる。もしそれ自身 S が何であるかのすべての要素の部分であるところの因果論上

統一する基礎的な特徴が存在するならば、それは他の要素すべてを統一するものとして看做されうる⁽¹³⁾。だから、例えば、名前「ソクラテス」は合成体ソクラテス、それは当該の質料を巻き込んだ形態 (*morphē*) であるが、そして彼の形相 (*eidos*) としての彼の魂双方を二重に指示する (*ditton sēmainein*) (*Met. Z* 6 1031b23, *H* 3 1043a29-b4)。アリストテレスは言う、「「或るこれ」は形態そして形相に即して語られる」 (*De An.* II 1 412a8)。

彼の HDE において「実体」は二つの方法で表現されるが、その一つは [Q2] により限定されたように、その単純な使用は [S1] 独立した基体となる存在者を意味しており、そのもう一方は [S2] 「或るものの実体」または「おのおののものの実体」というように属格において表現される事物に伴われるものである ([S1] : e.g., 90a10, b30, 91b9, 92a6, b13, 29, 93b26, [S2] : 83b26, 90b16, 96a34, b12)。『形而上学』Δ 8 における「実体」の語彙集の言い回しを借りるならば、[S2] により、アリストテレスは [Sb] 「基体について語られない事物における存在の根拠」としての「内在する構成 (諸) 要素」かそれとも [Sc] 「何であったかということ (本質)」のいずれかを意味している (1017b15-23)。(『形而上学』Δ 8 における [Sa] は [S1] と同一である (1017b13))。[Sc] は [Sb] と同じ様式において導入されており、「これ [何であったかということ] は、その説明言表が定義であるところのおのおののものの実体 (*ousia hekastou*) であると語られる」 (1017b23)。

彼の発見的論証的探求論 (HDE) において、アリストテレスが「あることの根拠である…実体」(90a9f) に言及するとき、実体の根拠は [Sb] 「内在する構成要素」と [Sc] 「本質」の両者に相応する仕方、しかも [Sc] が因果論的に解釈されるという条件のもとで、それ自身実体でなければならない。これは可能でありまた、実体と実体としてのその根拠が実在において分離されえない限り、実体の独立性規準を侵害しない。アリストテレスは「根拠の数は…「何故」の問いの下に理解される事物の数と同じである」(198a14f) と述べるが、「本質 (何であったかということ)」は「何であったかということ、全体 (*to holon*)、統合 (*hē sunthesis*) そして形相として」(1013b23-24) 四つの根拠のうち一つとして言及されている、厳密に言えば「形相」は「本質

の説明言表」であるけれども (*Phy.* II 7 198a14, *Met.* Δ 21013b22, a27)。実際、アリストテレスが[S2]に言及するとき、彼は[Sb]と[Sc]、または[Sb]か[Sc]を念頭に置いていたようにみえる(83a24, a39, 90b16, 93a12f, 96a34f, cf. 1017b21f, 983a27)。「ひとはいかに「何であるか」においてある述語を狩るべきか」という一節において「統合は事物の実体 (*ousia tou pragmatos*) でなければならない」と述べられている(96a22, 34)。例えば、すべて三は数、奇、二つの意味で(即ち、約しえず、合成されぬという意味で)素であるという要素を持つ。「三」の定義形成句は三が「何であったかということ」を意味表示する「第一の奇数」である(96a35f)。私は「Sは何であるか」の要素の全体性の故に、「おのおのの事物Sの実体」は「おのおのの事物S」、即ち、実体それ自体に他ならないと理解する。

この対応は何故主語としての「端的な実体」と述語としての定義形成句は同一の存在者、即ち実体を意味表示しうるのかを説明している。仮に厳密な同一性述定が「人間は理性的な動物である」によって与えられるとして、[S1]「人間」と[S2]「理性的な動物」は実体を意味表示している。この主張の一つの証拠として、「おのおのの実体に内含されている要素 (*hosa en tê ousia hekastou*)」(83b26)という一節を挙げることができる。[S2]はここでおのおのの事物は何であるかの述語により意味表示されている。彼が[S1]と[S2]を使用する理由は、これらは交換可能な主語と述語を述べているが故に、これら二つの表現における「実体」が同一の存在者(実体)を意味表示しているからである。もしこれが正しければ、われわれは何故[Sa]独立した基体Sとしての実体が[Sc]「Sは何であったかということ」と同一の存在者でありうるかを理解できる。また、[Sc]の内在的統体性の故に、それは本質を[Sb]「存在の根拠」として理解する可能性を開く。

われわれがアポリア諸章II 3-7で見えてきたように、もし[A]定義と[B]論証が(1)と(2)、(3)に関して無関係であるならば、何であるかと実体の論証を持つ様式は何も存在しないであろう。その機能と範囲は制約されるであろう。まことに、実体を知るに至る方法を提供することのできない探求論は失敗に終わるだろう。残る問いはアリストテレスにとってそのような方法を提供す

ることが可能であるかどうかである。

4. 何であるかの論証の論理学上および存在論上の条件

『分析論後書』II 8-10において、アリストテレスは定義と論証は互いに無関係であるという想定を克服することによって彼の HDE の全体的な計画案を展開している。彼は何であるかの因果論的展開を発展させ、そして新たな定義の理論を創造する途上にいる。この連関において、彼はいかに論証が「何であったかということ」の意味における「何であるか」を把握することに寄与するのかを明らかにすることに専念している(93a19, 91a25, cf. *De An.*, III 6 430b27: *tou ti esti kata to ti ên einai*)。II 8において、アリストテレスは「Sは何であるか」というソクラテスの問いを因果論的に解釈する方法に基づき「Sは何であるか」を論証する論理的そして存在論的諸条件を提示している。彼は「Sは何であるかの根拠を知ること」という試みとしてこの問いに対処することにより進展する。彼は次のように述べる。

定義とは何か、また、或る仕方では何であるかの論証や定義があるか、それともいかなる意味においてもあらぬかという諸点について、われわれはあらためて考察し直さなければならない。既に [II 2 90a1-9, 19-23 において]述べた通り、(P) [IIb]「Sが何であるか」を知ることと、[I & IIb]「Sが何であるかの根拠[M]を知ること」とは同じことであるから、[(Q)]…(P) その理由は、何か或る根拠 [M] があり、そしてこの根拠 [M]は当の事物 S と同じものであるか、それとも別のものであるかのいずれかであり、それが別のものであるとすれば、その事物 S は論証されるものであるか、それとも論証されえないものであるかのいずれかであるが、そのとき、(R) もし根拠が別のものであり、そして [Sが何であるかを] 論証できるものであるとすれば、(S) その根拠が中項 [M] であること必然であり、そして[Sは何であるかは]第一格において証明されなければならない。何故ならば、証明されることとは普遍的かつ肯

定的なことではなければならないからである (93a3-9)。

この一連の推論は幾つかの仕方で解釈されよう。例えば、推論の連鎖 ((P) – (S)) において、Philoponus と Barnes は (Q) 「或る意味で何であるかの論証が存在する」を (P) の結論として挿入している⁽¹⁴⁾。すなわち (P) と (P') であるので、(Q) が導出されるとしている。この議論をこの仕方で理解することにより、彼らはアリストテレスが (Q) を演繹することにより何であるかの論証を既に確立していたことを含意している。そのとき、全体としての推論は $((P \wedge P') \rightarrow Q) \wedge (R \rightarrow S)$ というようなものとなる。しかし、これでは議論がまったく円滑に流れていない。実際、(R) は仮定的な可能性の様式において (Q) と同一の内容を述べている。

しかし、Zabarella が解釈しているように、「何も付けくわえるべきではなくアリストテレスの文は完全 (*perfectam*) である」⁽¹⁵⁾。アリストテレスがこの節においてなしているのは何であるかを論証するための論理学上のそして存在論上の諸条件を確立することである。(P) は S が何であるかの彼の因果論的編成の基礎のもとに一つの認知状態を記述しており、その結果、S の本質の意味において、S をして何であるかたらしめる根拠を知ることは、S は何であるかを知ることと同一である。(P) は (P') により基礎づけられている。なぜなら (P') はそこにおいてその一つの組み合わせが (P') として機能するところの論証可能性をめぐる、事物とその根拠のあいだの諸連関の一般的な分析を述べているからである。それが述べているのは S の一つの判別される根拠 M が存在し、その結果 S は M によって論証される。かくして、M を知することは S が何であるかを知ることと同一である。

この何であるかの因果論的編成の基礎のもとに、アリストテレスは (R) を導く。それは「そのとき、もし (*ei.. toinun*) 根拠が別のものでありそして [S が何であるかを] 論証することが [いやしくも] 可能であれば」というものである。重要なことに、(R) は当該の可能性は条件的であるということ述べている。それは、実際、条件文の前件であり、それはアリストテレスがまだ (Q) にコミットしていないことを含意しているが、それは何であるかの

論証可能性の存在論上のそして論理学上の条件を確立する過程においてある。(R)であるとするなら、そのときアリストテレスは結論(S)を明らかにする。(S)は三つの要素により構成され、(1)根拠は中項Mとして置かれねばならない、(2)根拠MはSとは何か別のものでなければならず、そして(3)証明は全称肯定命題が保証されるべく第一格 *Barbara* により遂行されねばならない。そのとき、全体の議論は $((P' \rightarrow P) \wedge (P \wedge R) \rightarrow S)$ のようなものとなるであろう。この解釈は Philoponus と Barnes により好まれたものを少なくとも議論の流れにおいて改善したものである。内容に関してもまた、この解釈はアリストテレスをして、彼は保証されていない主張(Q)を導入することなしに、何であるかの論証の一般的な諸条件を挙げているという仕方では整合的なものとする利点を持っている。ここまでは、事実上、彼は単に或る特定された仮定が与えられた場合に、彼の結論を確立することに関心を抱いているだけである。だからこそ、数行あとで、同僚クセノクラテスの本質を証明する不運な方法を導入したあとで、「われわれはいかなる仕方ですれ[何であるかの論証]が許容されている (*endeketai*)か、初めから語ろう」(93a15f)と述べている。ここまではアリストテレスはただ本質の論証は可能であることだけを示した。彼はそのような論証が現実的なものであることを示さなければならぬ。

この再構成のもとでは、アリストテレスの結論(S)は究極的に(P)によって正当化される。(P)は何であるかの因果論的編成により基礎づけられる。(P)に関して、しかしながら、われわれはテキスト上の問題に面する。この節の文脈によれば Bekker の読み: '*to aition tou ti esti*' (*BnAn^c*) は Ross の読み: '*to aition tou ei esti*' (*AB²dE^cP*, Zabarella, Waitz) よりも正しいに違いない⁽¹⁶⁾。ここでは何であるかを論証する形式的な条件を特定することが問題となっている。「それが存在することの根拠」(Charles, Zabarella) という意味での「それが存在する [か] (*ei esti*)」ことの論証は II 1-7 で既に確立されているので、条件付きの文(R)として述べられる必要はない⁽¹⁷⁾。基本の前提はソクラテスの「Sは何であるか」の規定の下で、探求者は実際に「Sがあるかあらぬかの根拠」ではなく「Sは何であるかの根拠」を求めていること

である。アリストテレスは II 2 において [IIb] 「Sは何であるか」の問いによって求められるものは、[I & IIb]、即ち、「Sが何であるか」の中項 [M] を求めていること以外ではないことを確立した。そこでは彼は [IIb] 「協和音は何であるか」を問うことは [I & IIb] 「それら当該の数の比は何であるか」を問うことと同じであるとしている (90a18-23)。かくして、別の事例に即して言えば、蝕は何であるかということを知ることは蝕をして蝕が何であるかということたらしめている根拠を知ることと同じである。

「Sは何であるか」のソクラテスの問いはこうして因果論的に理解され得る。(P') は (P) の理由を提供している：M は S と同一であるのかそれとも別であるのか、そしてもし別であるなら、S は論証可能であるのかそれとも不可論証的なものであるのか。もしそれが論証可能であるのなら、S が何であるかということとしての S の同一性は中項 M によってこれを論証することを通じて確定される。それに応じて、S が何であるかということは M によって媒介される術語において分節されうるものでなければならない。かくして、結論 (S) がえられる。つまり、それはその根拠 M が S とは判別されるものどもにおいては第一格第一式 *Barbara* における推論によって遂行されねばならない。まとめるに、この節においてアリストテレスは彼の HDE の一般計画が実行可能なものであることを示すために、発見的探究の領域に形式的な制約を特定している。

5. ロギコス（形式的）推論

アリストテレスは、最初に彼の同僚クセノクラテスにより提示された実体である魂をめぐる一つの主張を論証する試みを吟味する。それにより、いかに諸実体にかかわる論証はあるかを探求する。彼は言う、

まことに、今 [II 4] 吟味された手法がその一つである。「Sは何であるか」を別の「Sは何であるか」[の説明言表] を媒介にして証明することは一つの方法であろう。というのも、「Sは何であるか」の諸項のなか

で、中項は「Sは何であるか」であること必然であり、そして固有性の諸項のなかで固有性がそうであること必然だからである。それ故に、同一のものであることが「何であったかということ」の諸項のなかで、一方は証明するが他方はしない。かくして、この様式は論証ではなく「Sは何であるか」のロギコス（形式的）推論（*logikos sullogismos*）であることは先に語られた（93a9-15）。

推論の型は「形式的推論」と呼ばれる、なぜならそれは存在の一般的かつ形式的特徴である「同」という概念に訴えているからである。「同」や「異」という一般的概念がそれに属する矛盾律は存在のあらゆるロギコスな（形式的かつ一般的）分析の基礎的装置である。「真理に即して哲学探究に向かう」ロギコスな議論は矛盾律の基礎のもとに「いかに語るべきか（*pōs dei legein*）」という方法により遂行される（*Top.* I 14 105b30, *Met.* Z 4 1030a27）。見てきたように、アリストテレスのプレディカビアと範疇の理論はそれら自身存在のロギコス分析の一つの産物である。「Sは何であるか」を証明する方法は同じSの判別される説明言表を通じてそれを証明することである。これは固有性の場合においてもそうである。しかし、「Sは何であったかということ」は「Sは何であるか」ということと「Sに固有であるもの」の双方によって構成されている。「それ故に（*hōste*）」、アリストテレスは同一の状況が本質（*to ti ên einai*）にも同様に適合すると推論する。

アリストテレスはII 6において『トピカ』I 4-5における本質の形式的かつ非因果論的な構成をわれわれに思い出させている。「Sであることは何であったかということ（本質）」は「Sが何であるか」におけるものどもに基づき構成される「固有なもの」である、そしてこれらだけが「Sは何であるか」においてあるものであり、そして全体はSにとって「固有性」である（92a7f）。その説明言表が定義形成句であるところの本質の概念を導入することにより、アリストテレスは名前により意味表示されるものとその定義形成句により意味表示されるものあいだの厳密な同一性を表現している。関連する諸項のあいだで、一つの説明言表は証明するが、同一の事物の別の説明

言表は証明しない。もしひとが何であったかということ（本質）の意味における何であるかを結論として証明することを試みるなら、ひとは前提において同じ本質を意味表示する説明言表を仮定しなければならない。一つの前提はその前提がそれ自身においてすでに含意しているところの諸特徴をその結論に伝達することができるだけである。さて、アリストテレスによれば、おのおのの事物にとってただ一つの本質が存在する。従って、当該の事物において単個の本質があるのでなければ、単個の事物も存在しない(cf. *Top.* VI 4 141a24)。そのとき、これはクセノクラテスのロギコス推論が退去する場所を示している。それは「証明しなければならないことを仮定している」ので、このタイプの推論は論点先取 (*petitio principii*) の論理的誤謬を犯している (*An. Pri.* II 16)。そのとき、一般的な帰結として、ひとは論証の結論において本質を証明できないということが帰結する。

クセノクラテスに帰属される形式的推論の一つの事例は魂についてのものでありそして「それ自身の生きていることの根拠」：A、「まさにそれ自身を動かす数であるもの」：B、そして「魂」：Cである (91a37-b1)。この推論において、それは非因果論的なものであるが、魂が何であるかは「その同じものであることという仕方で (*hōs to auto on*)」前提に仮定されている (91b1)。この様式を語るさいに、アリストテレスが意味しているのは、前提と結論における定義形成句は、それらが同じ存在者を意味表示する限りにおいて、同じものであるということである。アリストテレスが「同じものである」と語る時、彼は事物と本質のあいだの厳密な同一性を指示している。しかし、これらの項目ないし項が‘A’‘B’‘C’というような異なる文字によりラベルされている限りにおいて、この申し立てられた形式的推論は妥当なものでありそして実に形式的なレヴェルにおいては *Barbara* の事例である。もし形式的推論よりも他の本質を論証する様式が存在しなかったならば、アリストテレスの探求論は失速した軌みを立てて停止するであろう。彼の理論を前進させるためには、アリストテレスは本質を含むものの因果論的転回をなす必要がある。

6. 発見における情報の度合いと推論形成の並行する過程

ロギコス推論を吟味したのちに、アリストテレスは「初めから」何であるかの論証を探す新たな様式に乗り出す。このプロジェクトにおける彼の狙いは発見的探求と論証を統一し、そうして一方で論証を科学的探求の実行可能な方法とするなかで、発見的知識を科学的なものとすることである。

II 8におけるこの新たなスタートにおいてアリストテレスは彼の HDE のプログラムを最も精力的に追及している。発見的探求のゴールはなお例えば「雷」, 「人間」そして「魂」の「何であったかということ(本質)」或いは「ものそれ自体」という意味における何であるかを把握することである(93a19-24)。彼は次のように議論を展開している。

われわれは [I a] 「事実」を掴むことによって, [I b] 「何故か」〔理拠〕を探求する。これらは時として相携えて同時に明らかになることもあるが, 少なくとも [I b] 「何故か」〔理拠〕を [I a] 「事実」よりも先に知ることは不可能である。同様に, [II b] 「何であったかということ(*to ti ên einai*)」をもまた [II a] 「存在(あること)」を掴むことなしに知ることができないことは明らかである。なぜなら, [II a] 「あるか」を知らずにいる者たちが [II b] 「何であるか」を知ることはできないからである。ところで, われわれは [II a] 「あるか」を, 或る場合には付帯的に掴んでいるが, 或る場合には当の事物そのものに属する何ものか (*ti autou tou pragmatos*) を掴むことによって, 掴んでいる。たとえば, それは, 「雷」は「雲間の一種の音響である」, 「蝕」は「光の一種の欠如である」, 「人間」は「一種の動物である」, 「魂」は「それ自身が自らを動かす者」というものである。かくして, われわれが [II a] 「あること」を付帯的な仕方では知るところのものについては, われわれはいかなる仕方においても [II b] 「何であるか」を知るのに適した状態に置かれていないことは必然である。何故ならば, われわれは, そのものが [II a] 「あ

ること」をすら知らないからである。ところで、[IIa]「あること」を掴んでいないのに、そのものについて [IIb]「何であるか」を探求することは何も探求していないことである。これに反して、[その事物そのものに属する]何ものか (*ti*) をわれわれが掴んでいるものについては、容易である。したがって、[IIa]「あること」をわれわれがどのように掴んでいるかに応じて、われわれが [IIb]「何であるか」を知るどのような状態にあるかということも定まる。

かくして、その事物の [IIb]「何であるか」に属する何ものかをわれわれが掴んでいるものの一つとして、まず次のようなものがあるときよ。(1)「蝕」を A, 「月」を C, 「地球による遮蔽」を B とする。そのとき、[Ia]「蝕を蒙っているか否か」は B に関し [I & IIa]「果たしてそれがあるか否か」と探求することである。しかし、これは [I & IIa]「その説明言表があるか」を探求することと何も異ならない。そしてもしこれ [I & IIa] があるなら、かのも [Ia] もあるとわれわれは主張する。説明言表は矛盾のいずれかについてある、二直角を持つことの或いは持たないことのいずれかである。われわれがそれ [説明言表] を発見する時、それが無中項なるものを通ずるものであれば、われわれは [Ia]「事実」と [Ib]「理拠」とを同時に知る。だが、(2)それが無中項を通ずるのでなければ、われわれは「事実」を知るが、「理拠」を知らない。「月」を C, 「地球による遮蔽」を B とする。そのとき、「蝕」を A, 「満月の夜われわれのあいだに何も明らかなもの [雲] がないのに、影を作りえないこと」を B とする。そのとき、B「われわれの中間に何も無いのに影を作りえないこと」が C に属するなら、他方それに A「蝕していること」が属するなら、月が蝕を蒙っていること明らかである。そしてわれわれは [IIa]「蝕があること」を知っているが、[IIb]「蝕が何であるか」を知らない。A が C に属することが明らかであるとき、しかし [Ib]「何故属するか」を探求することは、[I & IIb]「Bは何であるか」、はたして地球の遮蔽か、月の回転かそれとも月の消滅かと探求することである。これは他の端項の説明言表である、例えばこれらにおいては A のそれで

ある。なぜなら、蝕は地球の遮蔽だからである。(3)「雷は何であるか」。「雲間における火の消去である」。「何故、雷が生じるのか」。「それは雲間において火が消されることの故である」。「雲」をC、「雷」をA、「火の消去」をBとする。C「雲」にBが属する。何故なら火がそのものにおいて消されるからである。これ[B]にはA、「音響」がある。そして、まさにBこそ初端の項Aの説明言表である。だが、これ[A]についてもふたたび他の中項があるとすれば、それは残された説明言表からのものとなろう(93a16-b13)。

この一節において、われわれは最初に「事物そのもの」という一文がその事物において[IIa]から[IIb]への探求の全過程を支配するために導入されていることを確認する。これがそうである理由はこの一文が「何であるか」への探求の究極のゴールを示す「何であったかということ(本質)」を示しているからである(93a19, 22)。何故「魂」は他の事例とは異なり「一種の」という制約を含んでおらず、むしろ事物それ自体を意味表示しているかと言えば、魂がその本質と一致し「魂は何であるか」の一部を「魂は何であるか」の別の部分から分割する余地がないからである。この種の論証不可能な事物は、無中項によって意味表示されるが、中項によって媒介された諸項に分節されえない。それにもかかわらず、アリストテレスは発見的探求の包括性を示すためにこの事例に言及している。『魂論』I 1において展開されているように、魂が何であるかの探求にとって、魂それ自体は論証とは別の方法によってのみ把握されるにしても、その様々な属性を考察することは有用である(402b18-25, III 6 430b27f)。

アリストテレスの新たな手順は探求の文脈において妥当な知識を生む当該の推論を組み立てることであるが、そこにおいて探求者は「何であるかの何ものか(*ti tou ti esti*)」や「事物そのものに属する何ものか(*ti autou tou pragmatos*)」を把握する。問われている諸項は「何ものか」を発見している度合いにより変化する(93a22, 29)。彼が導入している三つの事例に共通するものは、ひとは「何であるか」に属する「何ものか」を中項に置くべきであ

るということである。把握された中項の適応性に依存しつつ、提案された推論は成功した（また不成功な）探求の一部分として判断される。もし推論が大項を伴う無中項の前提を含むのなら、それは成功した探求の一部である。

(1)の場合においてこれは無中項なるものの前提を通して構成されるので、[I b] と [II b] 双方とも把握される。(2)の場合では [I a] と [II a] のみが把握される。だからこそ探求者は [I & II b] の探求を進め、「Bは何であるか」、はたして地球の遮蔽か、月の回転かそれとも月の消滅かと探求することである」(93b5)と続ける。(3)の場合に「雷」や「音響」というA項の説明言表である他の中項があるであろう。項Aの内容はこの探求の段階においては探求される対象(例、雷)かその類(例、音響)のいずれかでありうる。これは探求者がすでにこの段階において「雷」を「雲間の一種の音響」(93a22)と把握しているからである。実際の探求の現場の文脈に訴えることなしに、われわれはアリストテレスの諸項の交換の議論を理解することはできない。B. Landor が述べるように、これらの項について語るとき「それらはかくして(われわれは言うであろうように)あらゆる指示上透明な文脈において一方が他方に交換されうる」⁽¹⁸⁾。この置換を用いて、探求者はA項をさらに適切に説明する別の項を発見することができる。(2)やおそらく(3)の場合において、アリストテレスは何であるかの適切な論証の究明における進行中の探求を示している。

何であるかの諸要素の区別は、いかに論証が探求の一部でありうるかを説明し、またいかに発見的探求が論証の制約によってガイドされうるのかを説明している。これらの例が明らかにしているように、アリストテレスはトラック [II] の [a] 段階の発見の内に含まれる情報の度合いに注意を払っている。[a] 段階を発見することにおいて得られる情報はひとをして「何であるか」を把握する段階である [b] に到達することを可能にする。言い換えれば、アリストテレスは「何であるかの何ものか」に言及しそしてそのときA項を説明する無中項の前提を発見することによって彼の探求を完成させるべく中項を構成することを目指している(93a22, 28, 29, 35)。「何ものか」は「何であるかの根拠」(93a4)における具体的な「根拠」によって特定されるが、それ

は成功した探求の例である。何であるかの論証は論証と発見的探求の相補性を通じて獲得される。

7. 論証可能な存在者と論証不可能な存在者

今やわれわれはどの存在者が論証可能な事物であるか、そしてどの存在者がそうでないかを確認することができる。何であるかを論証する形式的な制約の内側で、存在者は第一に二つのグループに区分されうる。それらの根拠と同一な事物については、アリストテレスは II 9 において述べている、「したがって、何であるかの諸事物のなかで (*tōn ti esti*), そのうち或るものは無中項でありそして原理であるが、それらはそれらの存在と何であるかは基礎に措定されねばならないか、或いはそれとは異なる方法によって明らかにされなければならない」(93b21-23)。「算術」における「一」のような無中項や原理はそれらの根拠と同一である (93b24)。たとえひとがこれらの存在者が何であるかの論証を試みたとしても、せいぜいロギコス推論しか提供することができない。

だがわれわれはそのような存在者が何であるかを把握する他の方法を探索するでもあろう。アリストテレスは II 10 において別の種類の定義を提示している。それは「無中項なるものの定義は論証されえない何であるかの措定 (*thesis*) である」(94a9f) というものである。「措定」は論証されえない無中項の推論原理である (72a15-24)。それにもかかわらず、アリストテレスは当初措定として提示されている事物の不可論証的な知識をわれわれが得ることは可能であると主張する。幾何学における「大きさ」のような、その科学の論証されえない第一のものどもは、科学の演繹的体系の内部に生起していることにより、一種のフィードバック機構を通じて把握されうる、というのもそれらは第一のものとの諸特徴との関連で論証を認可するからである。探求者は科学の全体系がそれらに依存していることを把握することにより第一のものどもと無中項の諸事物の不可論証的な知識を得る。アリストテレスは言う、「すべての知識が論証されえるものではない、無中項の諸事物の場合には論証

されえない知識が存在するとわれわれは主張する」(72b18f)。このように、無中項の推論原理である措定の何であるかは、その諸属性の何であるかの論証を基礎として間接的に保証されるその存在を基底にして知られうる。例えば「一」に言及することなしに、ひとは最終的に数や算術の四原則といったその属性の知識を確立することはできない。

その根拠が区別されている諸事物のあいだでは、或るものは論証することができ、或るものは論証されえない(93a6)。論証されえないものについて、彼はそれらの「付带的諸属性」(90a11)を念頭に置いている、ただこの場合でさえ、ひとは推論を形成することができるでもあろう、ただそれはそれらに関わる根拠がある限りにおいてであるが。論証可能なものについては、アリストテレスはII 9において「中項を持つものそして実体の何か他の根拠があるものどもについては、ひとは、既に述べたように、何であるかを論証することなしに論証を通じて何であるかを明らかにする」(93b25-28)と述べている。「実体」はここで[S2]「本質」ではなく、むしろ[S1]独立した「基体」を意味する、というのも本質を演繹するあらゆる営みは*logikos*なものでしかないからである(第5節参照)。「S1」「実体」はその根拠が判別されているものである独立した基体となる存在者を意味しているに違いない。II 8における事例に従えば、われわれが見たように、「人」はそのような実体であるが「魂」はそうではない(93a23f)。アリストテレスが『形而上学』VIII 2において明らかにしているように、「[S1]「魂」と[M]「魂であること」(魂の本質)は同じであるが、[S1]「人間」と[M]「人間であること」(人間の本質)は同じではない、もっとも「魂」もまた「人間」と語られる場合は除かれるが」(1043b2-4)と述べられている。かくして、われわれは実際上分離されないが、説明言表において区別される実体の種類の場合には中項を捜さなければならない。これは望ましい帰結である、というのももし人間のような実体が純粋に論理学上の制約により探求の範囲から締め出されてしまったのなら、アリストテレスのHDEは魅力的な事業であることを止めてしまうだろうからである。

8. 因果論上統一する基礎的な特徴としての「何であったかということ」

適切な始動因が中項を占める限り、探求者は成功した論証を発見することができるということは一般的に同意されている。例えば、地球による遮蔽が、何故月が蝕を蒙るかを説明し、そして樹液の凝結が、何故落葉が広葉樹に属するかを説明する (II 8, 16)。これらの場合「普遍がわれわれに知られるに至る」(90a28)。これらの成功した論証においては、三項は外延において共約しておりまた相互に述語付け可能である。しかしながら、重要なこととして、アリストテレスは『形而上学』の一節において、始動因と目的因が本質として看做されうることを論じている。彼は言う、「何故これら煉瓦や石は家であるのか。探求者は根拠を探求していること明らかである。しかし、これは、形式言論構築術的に言えば (*logikōs eipein*) 「何であったかということ」であるが、これは或る場合には目的因であり…他の或る場合には第一に動かしたものである」(1041a28-30)。Logikos レベルにおける議論は *phusikos* (自然的) レベルと相補的でありうる。

『分析論後書』II 11 において、アリストテレスは「何であったかということ (本質)」が根拠であると捉えられうることを論じている。アリストテレスは自体的述定の二つの種類を含む中項として本質を捉えることにより論証を提供している。彼は半円における直角の数学上の証明を科学的な知識を得るものと認めている。彼は「われわれが事物について科学的な知識を持っていると思うのは、われわれがその事物の根拠を知る時である、そして根拠には四種のものがあり、一つは「何であったかということ」であり、もう一つは「或るものどもが存在するとき、これであること必然なもの」(94a20-22)と述べている。私はこの最初の根拠を「統括因」、二つ目を「必然因」と呼ぶ。アリストテレスはその中項がこれら二つの根拠を満たす数学上の証明を提供している。

この連関において、彼は [I b] 「半円に内接する角が直角であるのは何故

か？ 即ち、どのようなものがある時に、これを条件として半円に内接する角は必然に直角であるのか？」(94a28)を探求している。その論証はCが事実上半円における三角形の一つの角を示す「二直角の半分」B, 「直角」A, 「半円に内接する角」Cにより構成されている。この論証は $A\phi\alpha B$, $B\phi\alpha C$, そして $A\phi\alpha C$ となる(「 $A\phi\alpha B$ 」は「AはすべてのBに内属する」(全称肯定)を表す)。

この三つの項は事実上相互に同じものであるが、これは *logikos* な推論を構成していない。これはなぜならアリストテレスが本質の一つの説明言表を同じ本質の他の説明言表から推論しているものではないからである。同じ角が内属するところの基体は異なる。一方、結論「直角は半円に [おいて描かれた三角形の角に] 内属する」は半円において描かれた三角形の固有性を表しているが、必然因B項は半円における角の本質として捉えられている。固有性Aが統括因(本質)から推論されている。必然因Bは、二つの二等辺三角形を描くことから得られるが、それは半円における当該の角を形成する⁽¹⁹⁾。この事例において、固有な属性が統括因(つまり、本質)から演繹されている。この証明において明らかにされたことは、不定詞によって表現されている必然因Bは本質でもあるということである。アリストテレスは言う、「A(直角)がC(半円に内接する角)に内属することの根拠はBである。しかし、これ[B]は半円における直角であること (*to en hemikukuliō orthên einai*) であった。しかし、これ[B]は[CにおけるAの]本質に等しい、というのもそれは[CにおけるAの]説明言表が意味表示するものだからである。さらに、何であったかということが中項であることによって根拠であることが証明された」(94a32-36)。不定詞「Fであること」の名詞用法は、「Fであることは何であったかということ」(Fの本質)の省略形であり、ここでは統括因Bを意味表示する言い回しであるが、[Ib]「何故半円にある角は直角か」という問いと [Iib]「そのとき、半円における角にとって直角であることは何であったか」という問いを同一にする役割を担っている。[Ib]に対する答えは「二直角の半分だから」によって与えられ、[Iib]は「二直角の半分であること」によって与えられる。後者の答えは直接に半円にお

る直角の本質を示している。

しかしながら、本質はただ単に *logikos* (形式的) 様式において捉えられているのではなく、必然因の確立を通じて導入されている。かくして、アリストテレスは「これ (B=必然因) は何であったかということと同一である」と述べることによってこれらの根拠のあいだの同一性を表現している。彼は「同一」という言葉で、その知識は証明の過程を通じて得られたもの間の実際の同一性であることを強調している。アリストテレスは何であったかということの因果論的解釈を「事物の「何であったかということ」は中項であることによって根拠であることが証明された」(94a35)と結論することにより明確にしている。この一文は本質は中項によって言及される根拠であり、そしてそのようにしてその具体的な因果論的説明のなかで必然因であることによって理解されうる。再び、アリストテレスは『形而上学』において同一の見解を表明している、それは彼が本質を実体にとって因果論的に基礎的な統一するものであると語る時である。彼は「根拠は四つの仕方でも語られる、その第一の根拠をわれわれは実体そして何であったかということと語る。何故なら、「何故に」は究極的な説明言表に導かれるが、しかし第一の「何故に」が根拠でありかつ原理だからである」(983a26-29, cf 988b28, 1024b24)。

本質は因果論上基礎的であるので、それは三項のあいだで理想的には相互に述語付けられるところの全体である (cf. 99a16-29)。「根拠」Bと「根拠がその根拠であるところのもの」Aと「根拠がそれにとっての根拠であるところのもの」Cが相互に述語付け可能であるときに探求者は適切な科学的知識を得る (99a16f)。何故なら項 B は、項 A の説明を与えるものであるが、それに対して他の中項がない無中項の命題における要素だからである (72a7f, 99a21f)。この論証は論点先取にはならない。何故なら C の固有性、すなわち $A\phi\alpha C$ は C に属する A の本質、すなわち B から推論されるからである。最終的に発見されるべき本質は、B の故に $A\phi\alpha C$ という様式において事物に内在する当該の全ての要素を統一している。

9. 結論：論証理論に基づく新しい定義論

われわれはアリストテレスが発見的論証的探求論（HDE）の展開において彼の計画を遂行するその様式を辿ってきた。何であるか（「何であったかということ」（本質）として）の因果論的編成は知識を産出する推論に基づき何であるかを把握する途を開く。われわれは今や II 8 における彼の結論を理解する、より良い立ち位置にある。

われわれは「何であるか」がひとにどのようにして掴まれ、そしてどのようにして知られるに至るかを述べた、その結果は「何であるかについては推論も論証も成立しないし、しかし、それは推論を**通り**、論証を**通り**明らかにされる」というものである。それ故に、その根拠が別のものであるものの何であるかは論証なしに知ることはできないし、またその論証も存在しない。これはわれわれがすでに難問の諸章（II 3-7）で述べたところである（93b15-20）。

アリストテレスがこの結論に到達しているのは、「いかなる仕方でそれ[何であるかの論証]は許容されるか、初めから」考察したうえのことである（93a16）。「Sは何であるか」は彼の見解によれば、Sをして「Sは何であるか」たらしめる根拠として、因果論的に理解されるべきものである。根拠は自らがその根拠であるところのものから説明言表において判別されているものである限りにおいて、本質を把握することは知識を産出する推論に基づき可能とされる。探求者は本質を開示する結論を産出することにより何であるかを論証することはできないが、そのかわりに本質を当該の諸項目を因果論的に統一する基礎的な特徴として諸前提のなかに位置づけねばならない。論証の不可欠性は『分析論後書』II 8 において三つの判別される仕方で示されている、そこでは論証的推論を形成する過程は発見的探求の途と緊密に平行している（第6節）。かくして、アリストテレスはもしひとがその根拠が別である

ところのものの本質を把握しうるなら、論証を持つことが必然であることを確立している、その本質の論証は存在しないにしても。

探求者は本質を開示する結論を生むことにより何であるかを論証することはできないが、本質を当該項目の因果論的に基礎となり統一する特徴として諸前提のなかに置かなければならない。論証の不可欠性は、『分析論後書』II 8において三つの様式により示されており、そこでは論証的推論を形成する過程が緊密に発見的探求の途に並行している(第6節)。このように、アリストテレスは、その根拠が別のものである事物の本質を把握するために、論証を持つことの必然性を確立している。

アリストテレスはII 10において「何であるかはどのように定義形成句へと分節されるか」という問いに取り組むことによって新たな定義論を展開している(II 13, 96a20においてII 10の企てが回顧されている)。アリストテレスは結論として三種類の定義の存在を挙げている。「かくして、(A)一つの定義は何であるかの不可論証的な説明言表である。(B)もう一つは配列において論証と異なる何であるかの推論である。(C)第三の定義は何であるかの論証の結論である」(94a11-14)。これらに対応して、アリストテレスは三つの型の定義形成句(*horos*)の類型を導入しているが、それらのそれぞれが三つの型の定義の構成要素と「なるであろう(*estai*)」(93b30, 94a1)としている⁽²⁰⁾。(彼の未来形の使用は定義的説明言表はなお発見されるべきものであることを示している)。彼はそこでその定義形成句(b')を「[I b]「何故か」を明らかにする説明言表」(93b38)と名付ける因果論的な定義を明白に導入している。彼は次のように述べる。

かくして、(a')最初の定義形成句は意味表示するが、証明することはないのにたいし、(b')後者は言わば[II b]「何であるか」の論証のようなものとなろう(*estai*)、[語の]配列において論証と異なってはいるが。というのも[I b]「何故雷は起きるか」と語ることと[II b]「雷は何であるか」と語ることは異なるからである。すなわち、かたや「それは雲の間で火が消されるが故にこの状態に(*houtôs*)ある」と答えられるであ

ろうが、「雷とは何か」と問われれば、それは[B]「雲の間で火が消されることによる音響である」と答えられるであろうからである。したがって、同じ説明言表が異なる仕方でも語られているのであって、この仕方では連続的論証 (*sunekês apodeiksis*) であるが、この仕方では定義である (93b38-94a7)。

定義形成句 (b') は定義の一つの型、即ち [B] を構成しているが、それは「何であるかの根拠」として「何であるかの何ものか」の「何ものか」を規定することによって何であるかの全体性を提示するものである。「何故雷は起きるか」を語ることと「雷は何であるか」を語ることは諸項の配列において異なるため、(b') に基づく [B] の型の定義はただ「それが何であるかの論証のようなもの」と述べられうる。II 8 においてアリストテレスは結論として本質を論証するという意味における何であるかの論証の可能性を退けている。しかしながら、II 10 において定義と論証の両者に含まれている「同じ説明言表」を指摘することを通して、彼はそれが何であるかの連続的な (*sunekês*) 論証として「許容される (*endeketai*)」と主張している (94a18)。この型の連続的な論証は、事実上型 [B] の定義の説明言表と同一である (cf. 75b30f)。型 [B] の定義はまた「何であるかの推論」とも呼ばれ、「推論」が何であるかの説明言表の一連の組合せであるという点において論証とは異なる (94a11)。このようにアリストテレスは「いかなる仕方でも (*pôs*) 何であるかの論証があるか」を特定している (94a14)。

何であるかを分節する第三の定義形成句 (c') もまた存在する。アリストテレスは「雷の定義形成句は「雲間における音響」である。しかしこれは何であるかの論証の結論である」(94a7f) と述べている。彼はこの文においてこの型の定義形成句 (c') は何であるかの連続的な論証の一部を構成するということを示すために「何であるかの論証」に言及している。これはロゴコス推論ではない、なぜなら本質としての統括因から演繹されるものは何であるかの一部だからである。われわれが II 11 を考察した第 8 節でみたように、本質としての「統括因」は中項の位置を占めることができる。従って、ひとは、統

括因が何であるかのあらゆる要素とそれがその事物の根拠であるものの固有性を統一するものである限りにおいて、何であるかの一部を推論することができる。(c')が一つの連続的な論証に含まれる限りにおいて、それは因果論的に基礎的な統一する特徴、即ち本質によって説明されうる何であるかの一部を構成している。

当該部分は句「この状態に (*houtôs*)」によって言及されるが、これは発見的探求の実際の探求の現場について語っていることを示している。実際の探求の文脈において連続的な論証を持つことが可能である。この文脈において、アリストテレスが「何であるかの論証の結論」を [C] の型の定義と看做しているのは、この型の説明言表は彼の分割法に即して類 (音響) と種差 (雲間) によって構成されているからである。アリストテレスが II 10 の冒頭で「定義は何であるかの説明言表であると語られる (*legetai*) ので」と述べる時、彼はわれわれに彼の新たな定義の理論を初める地点としてアカデメイアの定義の伝統を思い起こさせている (93b29)。この意味で、定義形成句 (c') は学園において規定されたものとして定義の基本的な要件を満たしている。

アリストテレスは [A] を一つの定義の型、即ち「無中項の定義は何であるかの不可論証的な措定 (*thesis*) である」(94a11) そしてまたより簡潔な仕方「何であるかの不可論証的な説明言表」として特徴付けている。その定義形成句は名前や名前のような句が何を意味表示するかの (a') 「或る説明言表 (*logos tis*)」である、ただし (a') は (b') 「何故か」と (c') 「論証されるもの」双方をも意味表示できるものではあるが (93b30, 39)。(「山羊鹿」のような空虚な名前は (a') から排除されるが、それは「或る」という限定を伴い制限されることにより、当該の名前により意味表示される空虚な存在者は定義されえないからである)⁽²¹⁾。名前の意味表示はその「第一のものどもとそれらの諸定理」を探求する論証科学においてそれらの存在とそれらが何であるかに関して「容認される」が、(a') 即ち名前が何を意味表示するかの或る説明言表によって意味表示されるものは [A] に導く他の方法によってと同様に [B] または [C] に導く論証を媒介にして知られうる (76a31-36, 100b5-17)。[B] そして [C] は連続的な論証によって実現されるので、(a') はただ算術

における「単位」のように科学の無中項の定義 [A] にのみ割り当てられる (93b22-24)。われわれがその根拠が探求されているまさにその事物と同一であるものの種類を考察するとき、この型の定義 [A] は論証科学全体としての諸活動を通じて得られる。このように、何であるかは三つの型の定義形成句に基づく定義の三つの型において提示され、論証科学における適切な位置に配置される。これが、アリストテレスが彼の発見そして論証を結合した探求論 HDE を展開するなかでそれをいかに成功に導いているかの様式である。

註

- (1) M. Burnyeat は語 ‘*epistēmē*’ (「知識」) — それは「知っている者の認知的活動」か「知識の集体 (ボディ), 科学即ち命題の体系」のいずれかを意味している — の両義性に訴えることにより、「アリストテレスは科学の哲学から認識論を区別しなかった」と主張している。(B. Burnyeat, ‘Aristotle on Understanding Knowledge’, *Aristotle on Science The Posterior Analytics*, p. 97-99, 109-115, 138f (Padua 1981)). しかしながら、アリストテレスは認知的な状態、命題的な対象そして科学のあいだで、語 ‘*epistēmē*’ の両義性を論じることなしにそのままにしたということではない。これらの可能な諸意味の一つを判別することが要請されるときには、彼は非両義的な表現を用いることによりそのようなになっている。

アリストテレスは ‘*epistēmē*’ を、命題的な対象を生み出す体系のまたはそれを把握することの二つの視点から記述している。生産的視点は「原理」により伴われる前置詞 ‘*ek*’ (「～から」, 「～に基づき」) を用いることにより展開され、認識論的視点は、それを通じてひとは認知的な態勢を把握するところの「論証」によって伴われ前置詞 ‘*dia*’ (「～を通じて」) を用いることにより展開されている。「科学的前置詞」: ‘*ek*’ は「認識論的前置詞」: ‘*dia*’ と対比されている。アリストテレスは ‘*ek*’ を「原理」や「前提」と共に用いるとき、彼は常に「論証する」や「推論する」等の推論を示す動詞を伴って用いる。例えば、彼は言う、「真理に基づいて (*eks alēthōn*)、ひとは論証することなしに推論すること (*sullogisasthai*) ができるが、必然性に基づいて (*eks anagkaiōn*) ひとは論証することなしに推論することはできない」(74b15-17, eg., 75a30, 76a14, 77b4f., 78a5)。演繹されるものはただちには認知的状態ではなく一つの命題の対象である。

他方、認知的状態としての ‘*epistēmē*’ は常に ‘*ek*’ ではなく、‘*dia*’ により伴われる (ただし ‘*dia*’ は証明一動詞により伴われうるが、‘*ek*’ は決して認知一動詞により伴われることはできない (92b12, 93a10))。例えば、アリストテレスは言う、「誰であれ論

証を通じて知識を (*tên epistēmên di'apodeikseōs*) 持とうとする者は原理についてより知っているだけではなく、証明されるものよりもそれらの故によりよく納得しているものでなければならない(72a37-39, e.g., 71b17, 83b38, 84a5, 87b19, 88a11, 99b20, cf., 79a25, 83b36, 86a36, 88b31)。アリストテレスはひとは「原理から (に基づき)」知るとは考えなかったが、「論証を通じて」知る と考えた。

われわれは「論証科学」(e.g., 76a37, 84a10) を第一義的に科学的実践の結果として命題の継起や「命題の体系」(M. Burnyeat) というよりもむしろ端的な知識を生み出す体系ないし方法として理解しなければならない。‘*epistēmē*’を可能にする体系はそれ自身もまた‘*epistēmē*’と呼ばれる。実際、アリストテレスはそれを擬人化して言う、「すべての論証科学 (*pasa apodeiktikē epistēmē*) は第一のものどもに基づき (*eks hōn prōtōn*) 論証する (*apodeiknusi*)」(76b11-15)。

かくして、厳密な知識を産出する理想的な構造に向けての彼の立案は第一に、認知的次元ではなく構造次元で、論証科学の体系に帰結する。科学の構造は概念上認識論、つまり、いかにわれわれは知識を持つにいたるのか、から区別されている、双方とも論証の統一理論を創造するさいに相補的でありうるのであるが。

- (2) J. Barnes は彼の *Aristotle Posterior Analytics* の第二版 (Oxford 1993) において、十全に展開された公理的科学的哲学理論と実際の科学的実践の間の齟齬についての彼の気付きに基づく第一版(1969)の構想に対するその後の様々な応答を収集した。そこで彼は言う、「私は [1969 に] こう論じた、『分析論後書』においてアリストテレスは科学者にいかに彼の探求を導くかについて語ってはいなかった。彼は彼の職務を改善する最も効果的かつ経済的な方法をめぐる教育的なアドバイスを与えていた。論証理論はいかに知識の達成されたボディが提示されまた教えられねばならないかについての形式的な説明を提供している」。このテーゼの否定的側面、即ち『分析論後書』は科学的探求の方法を提示していない、という見解は、私がお今思うに、確かに真である。そしてそれは広く受け入れられている…。『分析論後書』は第一義に、それを実践している科学者が発見または構築するところの様々な事実と理論は、いかに体系的に組織化されかつ可知的な仕方で提示されねばならないかを探求することに関わっている」(xviii. f.)。続く箇所では、私は論証理論は Barnes の主張よりもはるかに豊かな哲学的アイディアと内容を含んでいると論じるであろう。
- (3) D. Charles, *Aristotle on Meaning and Essence*, p. 70 (Oxford 2000).
- (4) D. Charles, *ibid.*, p. 71.
- (5) D. Ross と J. Barnes は言語的制約 [Q1] いかに探求の項目を表現するかと存在論的制約 [Q2] いかに探求の対象を表現するかを混同したので、彼らは「確かに属性である」ところの「夜」や「蝕」がルート [II] によって処遇されているテキストに困惑した。一方 Ross はアリストテレスを責めて「彼は議論が進むにつれ語彙を形成している、そして望まれるほどには明快に形成することに成功しなかった」と言い、他方

- Barnes は誤った見解を主張する、「かくして [I a] と [II a] は内容によって区別されうるのであってそれらの疑問詞の形式によってではない」(D. Ross, *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, p. 610 (Oxford 1949), J. Barnes, *ibid.*, p. 203). Philoponus は双方を存在論的次元で取ることによって [Q1] を [Q2] から区別しなかった。J. Zabarell も T. Waitz も [Q1] を [Q2] から区別することをしなかった。I. Philoponus, *Analytica Posteriora*, p. 338, ed. M. Wallies (Berlin 1909), J. Zabarella, *Opera Logica*, p. 1050 (Frankfurt 1608, 1966), T. Waitz, *Aristotelis Organon II*, p. 380 (Lipsiae 1844).
- (6) [Q1] を [Q2] から区別しそこねている D. Ross は言う、「問い [II] *ei esti* と *ti esti* は、II 1 においては実体に言及したが、II 2 においてはより一層属性と事象に言及するようになり、先の言及はほとんどアリストテレスの心から退いてしまっている、その航跡はいまだに残ってはいるが」。J. Barnes は II 2 における語 (So) 「実体」(90a10) を削除さえしている (D. Ross, *ibid.*, p. 612, J. Barnes, *ibid.*, p. 48, p. 204)。
- (7) J. Barnes, *ibid.*, p. 204.
- (8) 注釈者たちは自体性述定の残りの二つは論証科学と何ら関係がないと解している。(eg. Philoponus, *ibid.*, p. 64, Zabarell, *ibid.*, p. 708, Ross, *ibid.*, p. 60, Barnes, *ibid.*, p. 114). 私の見解としては、自体性述定 3 「或る他の基体について語られないものは[自体的に属する]」は「単位」や「大きさ」のような、科学の第一の項という基体となる主語を特徴づけている (73b5-8)。自体性述定 4 「或るものに内属するものはそれ自身の故にそれに属する」は、「他のものによって」というプロセスを介して「もはや別のものの故にではなく (*ouketi di' allo*)」を掴むことによって、経験的探求を媒介にした因果的必然性を特徴づけている (73b10f., 48a35, 85b30-86a3)。
- (9) 90b12-17 において、十全な確信をもたらす「帰納」は定義による「或るものの実体」の知識を得る一つの方法として言及されている。この読みは Barnes のそれと対比される。Barnes, *ibid.*, p. 50.
- (10) プレディカピリアと述定の理論に関しては K. Chiba, *Aristotle on Essence and Defining-phrase in his Dialectic, Definition in Greek Philosophy*, pp. 220-245. ed. D. Charles (Oxford 2010) を参照。
- (11) 意味表示の二重の機能については K. Chiba, *ibid.*, pp. 239-245., C. Shields はこの問題を詳しく論じている。C. Shields, *Order in Multiplicity Homonymy in the Philosophy of Aristotle*, ch. 3 pp. 75ff (Oxford 1999).
- (12) W. Goodwin は通常 '*ara* (*pote*)' 「そのとき」を伴う未完了過去 '*ên*' 「であった」について説明している、「未完了過去 '*was*' (*ên*) (一般に '*ara*' と共に) は以前に否定されたり、見過ごされたり、或いは理解されなかつたものが、話し手や書き手によりちょうどそのようなものとして認識されている事実を表現するであろう」。私は未完了過去のこの用法を「弁証術的未完了過去」と呼ぶ。W. Goodwin, *Syntax of the Moods*

and Tenses of the Greek Verb, p. 13 (London 1929).

- (13) この類比的なケースが存在する。アリストテレスは第一の哲学に関する「存在論—神学アポリア (Ontologia (metaphysica generalis)-theologia (metaphysica particularis) aporia)」と呼ばれるものに直面したとき、彼は「不動の実体」を「それが第一であるが故に、そのような仕方では普遍的である」と記述している (1026a30)。因果論的に基礎となり統一する特徴である本質はそれによって統一されるすべての要素に全体的に行き渡るように思われる。因果論的に統一する基礎的な特徴を特徴づける説明論的アプローチに関しては、D. Charles, *ibid.*, ch. 8., pp. 197ff. を見よ。
- (14) Barnes, *ibid.*, p. 207, Philoponus, *ibid.*, p. 365.
- (15) Zabarella, *ibid.*, p. 1110.
- (16) Ross, *ibid.*, 93a4: ad. loc., I. Bekker, *Aristoteles Opera Tomus I*, ad. loc. (Oxonii 1837), Philoponus, *ibid.*, ad loc. Ross は彼の MSS の伝承の議論のなかで、彼自身「B と n が最も重要な MSS (写本) である」と認めている (*ibid.*, p. 89)。この言い回しはアリストテレスがプラトンのアイデアを他の事物にとってそれらの同一性の根拠であると認めるときに同様に用いられている：「一方アイデアは他の事物にとって何であるかの根拠であるが (*tou ti estin aitia tois allois*)、一はアイデアにとって根拠である」(*Met. I* 6 988a10)。
- (17) D. Charles, *ibid.*, p. 180, Zabarella, *ibid.*, p. 1110.
- (18) B. Landor, Aristotle on Demonstrating Essence, *Aperion*, Vol. XIX. No. 2, p. 130 (1985)。この論文で、Landor は Philoponus, Le Blond, S. Mansion, J. Barnes 等の注釈者たちの解釈における内的な首尾一貫性のなさを鋭く指摘している。しかし彼自身それらの問いを解決していない、というのも彼は本質を因果論的に基礎的な統一するものという解釈にコミットしておらず、また 93a4 の Bekker の伝承 '*aition tou ti esti*' を踏襲していないからである。
- (19) 証明の過程に関しては T. Heath, *Mathematics in Aristotle*, p. 37f (Oxford 1949) 参照。
- (20) '*horos*' と '*horismos*' の区別については Chiba, *ibid.*, p. 217-220 参照。II 10 の定義論に関しては以下参照。K. Chiba, Aristotle's Theory of Definition in *Posterior Analytics* B. 10, *Journal of the Graduate School of Letters*, pp. 1-17 Vol. 3 2008. HP: <http://hdl.handle.net/2115/32407>.
- (21) 私は II 10 冒頭部を次のように読む。「定義は「何であるかの説明言表である」と語られるので、かたや、名前や名前のような句が何を意味表示するかの或る説明言表 (*tis logos*) はそれとなるであろう (*estai*) こと明らかである (*phaneron*)、例えば、「三角形」が何を意味表示するかは、それが三角形である限りにおいて、三角形は何であるかである。まさにそのもの [「三角形」により意味表示されるもの] が存在することを掴むことによって、われわれは何故それがそうであるかを探求する。その存在を

われわれが知らないものどもに関しては、しかしながら、それ[当該の名前が意味表示するもの]をこの仕方で (*houtōs*) [何であるかの説明言表として] 仮定することは困難である。困難の理由は既に述べられた [92b19-25], すなわちそれが存在するか否かを付帯的にしか知らないからである」(93b29-35)。(私は 93b31: '*to ti sēmainei, ti esti hē trigōnon*' を Ross ではなく Bekker の text に従って読む。「仮定すること (*labein*)」(b32) に関しては, 92b15-17: 「幾何学者は「三角形」が何を意味表示するかを仮定した (*elaben*) が, 彼はそれが存在することを証明する」参照 (cf. 76a33, 76b7, 71a12)。

アリストテレスが (a') 名前が何を意味表示するかの或る説明言表と定義の一種類のあいだの関係をめぐる「明白性」主張をなすとき, 彼はそれらのあいだの四つの形式的組み合わせを念頭においている: (1) S^+E^+ , (2) S^+E^- , (3) S^-E^+ , (4) S^-E^- , ただし S^+ は名前が何を意味表示するかの説明言表を把握していることを, E^+ は何であるかの説明言表を把握していることを意味している。(3)と(4)ははじめから排除されている, というのも定義の言語的特徴(意味表示の二重の機能)の故に, そして(2)は II 7 92b26-34 においてすでに三つの「不条理な帰結」の故に否定されている。意味表示する説明言表(1)と(2)のなかで(1)だけが明らかに定義を構成するであろう。この三角形の事例は一つの名前が何を意味表示するかの説明言表がそこにおいて何であるかの説明言表である事例を挙げている。意味表示の「或る説明言表(句)」は定義の一つのタイプを構成するであろう。『トピカ』I 5 101b38-102a5 における「或る説明言表(句)」を伴う平行個所については, Chiba (2008) 参照。

謝意 本稿の英語版は David Charles 主催の学会 Questions in Aristotle's *Metaphysics* (Oxford University 2010.5.15) において口頭発表され, その後 Aristotle on Heuristique Enquiry and Demonstration of *What It Is*, *Oxford Handbook of Aristotle* pp.171-201, (Oxford 2012) として掲載されています。この間 David Bronstein 氏, 高橋久一郎氏, 荻原理各氏と有益な議論ができ感謝します。『分析論後書』に関して 25 年以上議論を続けていただいた David Charles 先生に心より感謝します。なお Handbook に掲載を進め, また英語版の改善に尽くして下さったその編者 Christopher Shields 氏に心より感謝します。